
バニラとストロベリー

水地あいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バナラとストロベリー

【Nコード】

N4013Y

【作者名】

水地あいる

【あらすじ】

学園に存在する謎の黒い扉。その扉は学園の地下に存在する防空壕へと続いていた。防空壕で徘徊する魔物を退治する学生、玲二。彼をサポートするというアルバイトを請け負った加奈は、やがて学園と防空壕に隠された謎に興味を持ち始め……。美形で冷淡なアイツと、美味しいスイーツ三昧な生活を目指すワタシの奇妙な協力関係が始まった！！（改稿版）

#0001 「学園」(1)(前書き)

同作品の改稿版です

同じところまで投稿したら前作を消す予定です

学園七不思議 そんなことを考えた。

ゴールデンウィーク明けのことだ。

入学してからまだ一ヶ月も経っていない私とすれば、まだ学園七不思議の一つも知らない、浅学の身の上であつて、そんな私が学園七不思議に容喙する不遜を行うわけにはいかないのであるが、この学園キャンパスが忍者屋敷のようなギミックに富んだ場所でないとするならば、その光景はまさに学園七不思議に値するに相応しいと思えた。

それは、早くも新入生達の「嫌いな教師No.1」に認定された世界史教師に因縁をつけられ、学園寮のルームメイトである美帆と共に、授業で使用したプロジェクターを第二美術準備室へ運び終えた帰り道のことだった。

始めは世界史教師に対して愚痴を言っていた美帆も、すぐに語録が尽いて話題を転換した。

確かに三白眼なところは怖いし、冷淡に非難を浴びせてくる様は恐ろしい。けれど根は優しいはずだと、訳もなく考えていた私は心なし安堵した。

それから美帆は、今日の放課後に約束している駅前センター街での食べ歩きに思いを馳せて、何処の新作が美味しかったとか、何処の商品がオススメだとか、のべつまくなしに口を動かす、私は終始それに圧倒されるばかりだった。

私も一般の女子程度には甘いものが好きだし、得た栄養の半分以上が胸に利用されているような美帆とは違い、体に脂肪がつきにくい体質である。それについて既に半ば諦めはついているが、それとこれとは別問題なのだ。

両親の猛反対を受けながらもこの学園への進学を希望し、中学の教師陣からのランクを落とせコールにもめげず、猛勉強の末に臨ん

だ受験戦争に勝利した経緯を持つからして、親からの過度の支援を期待できぬ身。最低限の仕送りを受け取っている以上、支援の上乗せを頼んでしまえば「ほらみたことか」と返ってくるのは目に見えている。本来なら自分の趣味趣向のためにアルバイトでもするべきなのだろうが、あいにく今現在は帰宅部の身に甘んじている。

要するに、私は金欠なのだ。

いくら美味しいものが目の前にあっても無い袖は振れない。

そんな訳で、大はしゃぎの美帆と対照的に、私は心ここに在らずの心境で、あまり来ることのない実習棟を観察しながら歩いていたのだ。

そして、それを見た。

実習棟はその名の通り、多くの実習室と実習準備室が交互に配されている棟だ。もちろんそれ以外にも教室はあるが、少なくとも今いる一階にはそれ以外はないはず、だった。

だが事実、それらに挟まれた通路を見つけてしまったのだ。

広さはそれほどもなく、奥に黒い扉が付随していた。艶のない漆黒は鈍く、重そうで、一人二人が体当たりしてもびくともしそうにないほど重厚な迫力を持っている。

それだけなら見かけても素通りしていただろう。

私は無意識のうちに足を止め、同時に左手で隣を歩く美帆の裾を掴んだ。

「ねえ美帆、こんなところにこんな通路、あつたっけ？」

急停止させられた美帆は若干の不満を滲ませながらも、私が指差した方向を見た。そして、怪訝そうに眉目を寄せ「いや……ちよつと記憶に無い」と言った。

教室の入り口に必ず添えられているプレートも扉には存在しないし、一見して何の部屋になっているか想像がつかない。それよりも不思議だったのは、先ほど通ったときには気づかなかったということだ。

それ故にふと、学園七不思議などという言葉が浮かんだのである。

「ねえ、これ……」

「うん、これって」

怪しい。

怪奇現象というのは夜限定でしか発生しないものだと思っていた。顔を見合せ、顔きあつて近くに寄つてみる。

それとなく周囲を警戒するのも忘れない。

おずおずと扉に触れてみると、鋼鉄のような冷やややかさは感じるものの、皮膚のような柔らかな感触を指に伝えてくる。真下には鎖とゴツイ南京錠が転がっていて、誰かが開けっ放しにしていることがモロバレだ。

怪しい。

かなり怪しいけど　かなり知的好奇心を刺激される。

「ねえ、美帆」

「だめ」

「まだ何にも言つてないし……」

大げさに項垂れて見せると「まあ加奈だし。なんとなくわかる」とツツコミが返ってくる。

「だってこんな怪しいと滅多にないよ？　アドベンチャーだよ？

山があれば登るのが男でしょ!？」

「山じゃないし、男でもないよ。第一、南京錠付とか、明らかに立ち入り禁止の場所じゃん。もしバレたら、最悪退学になるかもだよ?」

美帆から放たれた退学の二文字は、私に多大なダメージを与えた。ヒットポイントが百ポイント減少する。

しかし、私は私を裏切れない。好奇心には敵わなかった。

「ちょ、ちょっと見るだけ！　この扉をちょこつと開けてみるだけでいいのよ！　ね、いいでしょ?」

「……でも」

好奇心の堤防から開放されている私は、美帆の気持ち揺れているのを察知して、無敵の気分で美帆を説得にかかった。

「大体、開いてるのがいけないんじゃないし、ちよつと覗くくらいで退学なんてオーバーすぎだよ。美帆も気になるでしょ？」

「気には、なるけど……」

「ならちよつと見るだけ見てみようよ。それから考えよ」

美帆はまだ少し悩んでいる様子だったが、それでも恐る恐る扉を見て、こちらを見て「ちよつとだけね？」と言った。

私は施錠されていないノブを捻り、扉を押し開いていく。

暗闇を、光が切り裂いた。追いつてられ、散り散りになって逃げていく闇の先が、少しずつ暴かれていく。

ホラー映画を見ているときのような興奮と緊張感。高揚感が、扉を開く手を後押しする。

扉の先にあつたのは小部屋だった。山積みされた木箱とそれに囲まれるようにして地下へと続く階段が伸びている。部屋には電灯がなく、階段がなければただの物置だったろう。しかしその階段が違和感の元だった。私は好奇心に釣られるまま、奥に足を踏み入れる。階段の奥を覗き込んで見るが、入り口から差し込んだ真昼の陽光をもってしても、階段の先が照らし出されることはなかった。

かなり、深そうだ。

私は迷わず階段を降り始めた。

「ちよ、ちよつと！」

僅かに逡巡し、美帆が後をついてきた。

「ねえ、加奈。これマズいよ。帰ろう」

美帆は窘めるようにそう言った。

私はそんなことをお構いなしにどんどん下へ降りていった。澆刺とした声で「平気平気」と口ずさみながら。

パコ、パコというサンダルシューズの立てる音だけが、狭い通路に乱反射して吹き抜けていく。しばらく降りると、ついには入り口の光が届かなくなってしまう、携帯のフラッシュ機能で足元を照らさなければならなくなった。

降りるにつれて、次第にひんやりとした空気に変わっていくのがわかる。

この先に何かがあるか、という話が出来たのは最初のうちだけだった。

終点が見えない。

次第に時間の感覚がなくなってくる。

十分ほど降りたところで、このまま階段が永遠に続くのではないかと、益体もない想像が頭をよぎり始めた。

気づけば、無意識のうちにお互いの手を握り合っていた。好奇心の裏に潜んだ恐怖心がそうさせたのだと思いつたが、心細さを温もりが遠ざけてくれる。

時間にして十分か、十五分か、それより多くの時間階段を下るとどうとうその終わりが現れた。

「おー……やっとなつた……」

「長かったあ……」

着いた先は小部屋だった。

小部屋の両端には、何が入っているかわからない木箱が山のように積み上げられ、古びた樽に瓶、ランプなどが雑多に置かれている。確保されている足場らしきものを辿ると、先ほどの扉と瓜二つの扉が壁にくっついているのが確認できた。

思わず嘆息し、

「もう階段は勘弁……」

「……同感」

手を煽ぐようにひらひらと泳がせた。

しかし、そのまま帰ることはしなかった。

もし同じように扉を開けてまた降り階段が続いているなら、そのときこそ帰ればいい。

そのような気持ちで、私は些か無用心なほどの素早さで扉に手を掛ける。

そうして、その鍵のついていない黒い扉を押し開くと、雰囲気

一変した。

先程までは壁も床もコンクリートで、白く清潔な塗装もされていたし、所謂学校の一部だった。だからこそ現実味があった。

しかし、扉を境にして、向こう側は学校ではなかった。

剥き出しの土が押し固められた通路を、木製の枠組みで支えている。

柱同士に渡されたケーブルにはランタンのようなものが吊るされている。そのいくつかは火が入っており、遙か先まで広々と続く通路を浮き彫りにさせ、先に入っていたであろう人間の存在を感じさせた。

原爆資料館で見た防空壕とよく似ている。

顔を見合せ、どうする？ とアイコンタクトを送ってみるが、美帆に通じる気配はない。

不思議そうに小首をかしげ、見つめ返してくるだけだった。

ため息を鼻息に変えて、視線を逸らすと通路を眺め見た。

通路は数人が横並びに歩けるほどに広い。その奥がどうなっているのかはわからないが、幸いランタンに明かりが灯っているため光源の心配はいらなそうだ。

仄暗い防空壕の奥から、風の抜けてくる薄気味悪い音が聞こえてくる。

洞穴などとは違う、人工的な作りのおかげで恐怖感は薄いものの、吹いてくる冷涼な風のせいで心の奥底まで冷えきってしまいそうだ。ランタンの明かりがゆらゆらと揺れ、まるで防空壕自体が蠕動しているかのような錯覚を齎している。

私は繋いだままの美帆の右手を引いて、息を殺し、ひっそりと足を踏み入れた。

最初の十字路を直進し、木箱を迂回して次の三ツ又を左に進む。通路は先ほどより狭まり、二人が横並びになると若干手狭に感じる程度になった。しかし、しばらく進むと若干広いフロアに出た。道はさらに奥へ続いていて、その先で右へ折れている。

先ほどから通路の隅に木箱や皮袋が纏められているのが目に付く。何が入っているのか、若干気になる。

後ろ髪を引かれつつ先を進むと、三ツ又に差し掛かった。三ツ又は左に進むと予め決めたのだが、残念ながらそちら側の通路は崩落していて通ることが出来なかった。

「うーん、さすがにこれは通れそうにないね」

「加奈が本気を出せばこのくらい……」

「美帆が私のことなんだと思ってるのがひっじょーに疑問だわ」
軽口を叩いて奥に続いている通路へ向かおうと踵を返したとき、聴覚を何かの音が揺らした。

立ち止まると片手を上げて美帆にも静止をかける。

「ねえ、今何か……」

警戒心から自然、密やかになる声音で確認を取ろうとしたとき、今度こそはつきりとその音が聞こえた。

二人は揃って、ギクリと身を強張らせる。

ゆっくりと顔を見合わせて、僅かに震える声で問い合う。

「……今の、もしかして」

「……遠吠え、だった？」

犬の遠吠えのような声は、しかしこの場所の異質さ故に、樂觀視することを許さない緊迫感を二人に齎したのだった。

細い通路を乱反射しながら届いた遠吠えは、しかしそのために正確な位置や距離の把握を妨げられ、漠然とした不安が心を蝕んだ。ここは用心のためにも引き返したほうが得策だろうと、図らずも二

人は同時に思った。

しかし、数メートル先で左方向に折れた通路から、ヌツと巨大な体躯が姿を現したのはそのときのことだ。

大きさで言えばそれほどでない。大型犬ほどのそれは、漆黒の体毛に覆われていた。ランタンが放つ光は、その体毛で反射もせず消え失せ、艶がない。漆黒に包まれた四足獣は、その狂暴性と獰猛な本性を真紅の瞳に載せ、こちらを睨み付けている。

剥き出しの犬歯は鋭く長い。

友好的とは程遠い。

むしろ敵対的でさえある。

警戒しているのか、唸り声をあげながらゆっくりと歩を進める獣は、だがその我慢が長く続かないことを、口元から滴る涎の滝が物語っていた。

これはまずい。

息を詰め、相手に合わせて後ずさりしながら思索する。

こんなのがいるとは思いもしなかった。

あの太くて強靱そうな四肢からして、全力疾走しても逃げ切ることは容易くなさそうだ。

先手を取って、怯んだ隙に逃げるのがベターか。

ちらりと横目で窺うと美帆は恐怖のあまり顔面蒼白になっていた。我を忘れて逃げ出すほどでないだけマシだ。

自分がやるしかない。

乗り気ではなかった美帆を、私が強引に誘った結果が、これなのだ。

美帆を残すという選択肢も私にはあつたはずだ。結局私は自分の心細さと美帆の優しさに負けたのだ。

その責任は果たさなければいけない。

心配してくれる家族の元に、美帆を返さなければいけない。腹をくくった。

「美帆。私が走れって言ったら全力で逃げるのよ」

相手を警戒して視線を逸らさずに小言で囁くと、美帆が目を見開いた気配を感じた。しかし、それ以上はない。思っていたより冷静そうだ。

美帆は小さく「わかった」と口にした。

ゆっくりと後退しながらポケットから飴を一つ掴みとる。

心臓が胸を叩きつける。

もし失敗したら　なんて考えない。

絶対に成功させるのだ。

入り口までつけば扉がある。

あれを閉じてしまえばきつとそれ以上追ってはこられないだろう。生唾を飲む。

一つ手前にあつたランタンが視界に入ってくる。

今ッ！

握っていた飴をランタンに向かって投げつける。当たるだけでもランタンが落ちてても、それなりの音が鳴れば十分に隙は作れるはずだった。

しかし、投げた飴がランタンに当たることはなかった。

投げた飴は壁面に当たって、小さな音を立てながら跳ね返る。

獣の視線が一瞬、そちらを逸れる。

ドクン、と血が跳ねた。

「走って！」

視線を逸らしていた獣が、その声に反応してこちらを向いた。すでに詰め寄っていた私は、その横っ面目掛けて蹴りを放つ。避けようと身を抜いた相手の鼻に爪先が当たり、痛みに叫び声があがった。相手が飛び下がったのも見ずに、そのまま反転すると駆け出した。美帆は指示通りに走り出していたようで、前のほうを脇目も振らずに走っている。

足先の痛みに顔をしかめながら、どれほどの牽制効果があつたの

か確認したくなかった。

走りながら後ろを見ると、ちょうど立ち直ったらしい獣が、獰猛な唸り声を漏らしながらこちらに向かつて駆け出すところだった。

開いた距離は、僅か五メートルもない。

しかも、予想外だったことは四足獣のスピードがかなり早いことだった。それなりのスピードを予測していたが、これは埒外である。思わず心の中で悲鳴を上げた。

必死に両足を動かすが、向こうは強靱な足を駆使し、容易く上回る速度で迫ってくる。

五メートルあった距離は、あつという間になくなってしまった。

焦ってポケットをまさぐってはみるが、大したものが入っていない。むしろ携帯と飴しか入っていない。

思考が逸れた空喰を、衝撃が襲った。

あつ、と思ったときにはすでに遅かった。

つんのめり、急接近する地面に受け身を取ることさえできなかった。

倒れ伏す衝撃に、背中からの獣の体当たりで受けた衝撃で、肺の中の空気が抜け出てくぐもった声が漏れた。

余りの痛みと、呼吸困難に歯を食いしばって耐えていると、背後からの重圧が増した。外見を裏切らない体重で押さえつけられ、呼吸さえままならない現状ではどうしようなかった。

荒い鼻息と獣臭が耳元近くを掠める。捕らえた獲物が食べられるのかどうか、匂いで判断しているのだろうか。

必死に顔をあげて確認すると、視界にはすでに美帆の姿はなかった。

ほっとしたような、悔しいような複雑な心境に陥って、しかしそんな場合ではないと思ひ直す。

腕を使って体を捻り、獣の下から抜け出そうとするが、相手も逃がすまいと体重をかけて押さえ込んでくる。

だが、それだけで済むわけもなかった。

荒い息遣いが首元に近づいてくる気配を明確に感じ取り、超然とした恐怖が体の隅々に行き渡って、思わず身を硬くした。

アフリカなどでライオンやヒョウの生活を撮影したドキュメンタリー番組の一場面。

獲物を捕らえた王者たちは、それらを逃がさぬように喉笛に食らい付き、抵抗力が削ぎ落とすのだ。

それがまさに今、自分の現状と酷似しているように思えた。

これから訪れるだろう痛みと苦しみと絶望の果てに、自分は死ぬてしまうのだろうか。もう二度と、学校の帰り道で買い食いもできぬのであろうか。ああ、それならばせめて一昨日、財布の中身と葛藤してストロベリーシャーベットの練乳添えの注文を泣く泣く断念するのではなかった！

恐怖と絶望の果てにそのようなことを考えたのはコンマ二秒ほどのこと。まさに走灯馬の如く一昨日寄ったアイスクリーム屋の景色が過ぎっていった。

だが、そこから意識を現実を引き戻させたのは、訪れるはずの激痛ではなかった。

急に背後を押さえつける圧力が減じたかと思ったら、直後に何かが転がる激しい音が鼓膜を叩いた。私は目を瞬かせ、すばやく立ち上がりながら周囲に視線を走らせた。

片手で抱えるほどの木箱が一つ、後方に転がっており、それを挟む形で先ほどの四足獣が唸り声をあげている。

先ほどの大音響は、この木箱が転がる音が狭い空間で反響しまくったせいだろう。それを投げた張本人は顔面蒼白で、しかし漲るような決意に満ちた目をして、それらに対峙していた。

「加奈！ 早く！」

美帆の言葉にハツとして、私は駆け出した。

ギヤアウ！ と叫び声がして四足獣が追いかけてようと木箱を跳び

越えてくる。美帆はもう一つ携えた木箱を両手で持ち上げ、威嚇しながら後退し始める。

「美帆！」

恐怖と安堵と緊張がごちゃ混ぜになった声音で呼ぶと、彼女は硬い表情ながらしっかりと頷いた。

「私が、ほんとは加奈を見捨てるわけ、ないで、しょー！」

気合一発。

美帆の投擲した木箱は、こちらに向けて再び歩を進めていた獣の足元付近に激突して転がった。相手もそれにぶつかることなく、すばやく後方に下がってやりすごした。

二人はそれを見て踵を返す。

全力疾走もかくやという勢いで、防空壕を走り始める。

それを獣は叫び声を上げながら追従してくる。

多少距離が開いたとはいえ脚力の差は埋めがたく、またしてもあとという間に距離が縮まってしまふ。美帆も、両手に木箱だけを抱えて戻ってきたようで、それ以上に有効な手段は残されていないかった。

ぐうたら生活を送り、悲鳴を上げる衰えた体に鞭を打ち、二人は走った。

ついに、最後の角を曲がり、残りは十字路を挟んで一本道をなつたとき、美帆が背後を振り返ってギョツとした。太い前足が凄まじい速度で振り下ろされるところだったのだ。

慌てて壁際に寄って避けるが、今度は反対の足で横殴りに責めてくる。

美帆が今にも倒れそうな顔をしながら立ち竦んだのを見て、ステップを踏んで左足で急制動をかける。勢いを乗せた右足で、猛然と襲い掛かる獣の前足を蹴り上げた。

そのまま軽く踏み込んで踵落としよろしく、獣の顔面を蹴りつける。

しかし、ギャと叫び声を上げながらも、標的を変えた四足獣はそのままこちらへ突っ込んでくる。

「ッ！」

左足だけで体を支えていた不安定な姿勢。

体勢を整えることなどできず、押し倒されるようにして転がった私に食らい付こうと大口を開けた獣の横っ面を、美帆の投げつけた携帯が強打した。

最近の軽量化が進んだ携帯とはいえ、至近距離から投げつけられれば凶器である。仰け反った獣の顎に、追いつちとばかりに膝蹴りを打ち込んでやる。

「もう少しだよっ！」

美帆が差し伸べた手に捕まって体を引き起こすと、もはや後ろを振り返ることもせずに走った。

例の獣は、先ほどの攻撃が予想外にダメージになったからか、先ほどまでの脚力はないながらも、恐ろしい速度で肉薄してくる。

もう二人は、前だけを見て叫び声をあげながらも、ただただ走った。

十字路を通りすぎたとき、暗がりには何かがあったような気がした。全力疾走をしていたためによく見えなかったが、強烈な感覚に引きずられるようにして、後方を見る。

ちょうど、四足獣は十字路に入ったところで、その太い前足で駆けていた肉体が唐突に二つに分かれた。

正確に言えば四つの足と胴体とに分解された。

宙を滑るように前進していた獣の胴体部分が、支えとなるべき四肢を失って地面に落ちる。勢いに乗っていた胴体はそのまま地面をごろごろと転がっていき、壁面にぶつかってようやく止まった。遅れて事態を確認しようと四足獣の首が動き、自身の四肢を視界に入れる前に、その頭が落ちた。

「加奈ッ!？」

突然足を止めたことに気が付いた美帆が、悲鳴のような声をあげた。しかし、自身もその光景を視界に捕らえるに至って、同じく足を止める。

四足獣のすぐ横には、日本刀のような長い刃物を携えた青年が立っていた。彼は自身の作り上げた肉片を一瞥すると、刀を鞘に収めてこちらに視線を向けた。

その炯眼に射竦められた美帆が、小さくヒツと息を呑んだ。

私も怖気づいてはいたが、彼が窮地を救ってくれたのは確かである。

お礼を言つべき場面であるが、この青年が何者なのかが謎だ。

服装からすれば同じ学園生なことは確かだろうが。

呆然と立ち尽くしながらも、そのようなことを考えていた私に、彼は静かに問うた。

「ここは立ち入り禁止区域となっているはずだが。お前たち、何故ここにいる」

有無を言わせぬ口調で断じられ、冷や汗が一つ。

額から流れ落ちていくのを知覚した。

ノックを二度。

「学園長、玲二です」

「お入りなさい」

中からすぐいらえがあり、玲二と名乗った男がドアを開いた。

「失礼します」

玲二は部屋の中に入るとすぐ左に捌け、視線で私と美帆に入室を促した。

学園長室に入るのなんて初めての経験である。「失礼しまあす」とおっかなびつくり足を踏み入れると、続けて美帆も入室を果たした。

室内は広くスペースを取られており、書架や飾り棚などに挟まれて応接用のシックな色のソファが置かれている。テーブルはガラス張りだ。

その奥に黒檀の執務机があり、学園長はそこへ備えられた椅子に体を預けていた。

学園長は入学式の際に一度その姿を見た限りであったが、私は内心感嘆の溜息をつかざるを得なかった。

白いものが混ざり始めた頭髮は綺麗に整えられ、皺の深い顔立ちは朗らかで優しい印象が目立つ。

臆たけた貴婦人とはこの事か、と思える。

学園長とはそのような人だった。

学園長は頬に手を当てて密やかに笑った。

「あらあら。玲二君がお客様をお連れするなんて、初めてのことでなくて？ お二人とも、うちの生徒さんね」

「はい。この二人は例の地下で保護し、こちらにお連れしました」それを聞いた学園長は僅かに表情を変えた。緊張気味の私にそれが気づいたときには、もう穏やかなものに戻っていた。

ちなみに、お連れする、と言ってしまえば語弊がある。

「あらぬ疑いをかけられてから謝罪するより、真つ先に謝罪に出向いたほうが利口だと思っぞ。お前たちが、今後もこの学園で生活するつもりなのであれば、な」

そんな脅しに、ほいほいと着いていくことしかできなかっただけなのだ。

「そうですか。ご苦勞様でした。後のことは引き受けますので、戻ってよろしいわ」

それを聞いた玲二は一礼すると「失礼します」と口にして出て行った。

取り残された私は、隣の美帆と目配せをした。

「ふふ。そう緊張なさらなくて結構よ。どうぞお座りになって」

学園長は椅子から立ち上がると、そう促した。私は緊張で回転率の落ちた脳味噌を稼働させて下座がどちらになるか導き出すと、頭を下げてそちらに座った。

「失礼します」

「し、しつれいします!」

革張りの高級そうなソファは容易く二人分の体重を受け入れ、その座り心地に軽く驚嘆した。驚きから逸して姿勢を正していると正面のソファに学園長が腰掛けた。

「さて。まずはお二人には一つ、お願いをしなくてはいけません」

「なんででしょうか」

その返答がなんであるかなんとかなく予想がついたが、私はあえてその先を促した。

学園長は頷いて。

「あの場所に関する、全てのことについて口外しないでいただきますのです」

予測されたものだ。二人は頷いた。

それを見て、学園長はほっとした様子を見せた。

「ありがとうございます。私としても措置は取りたくないのですが、お二人のお心遣いに感謝しますわ」

それは、そうだろう。

緘口令が敷かれることは歴然としていた。

それを破ってしまえば何らかのペナルティがあることは考えていたが、学園長の口から「措置」という言葉が出たことで、背中に怖気が走った。「措置」が停学や退学という枠に収まらないものであるような……そんな予感。

私のその様子に気づかず、学園長は話を進める。

「それともう一つ、これは強制というわけではないのですけれど」
学園長は手を束ねて身を乗り出した。

「玲二君の手助けをして欲しいのよ」

「お断りします」

間髪いれず、美帆が言った。美帆は部活にも入っているので、引き受けるわけにもいかないのだろう。

「そう、それなら仕方ないわね。そちらの方はどうかしら？」

横顔に鋭い視線を感じる。

「もちろん只とは言わないわ。もし引き受けてくださるなら、奨学生待遇として迎えさせていただきますし、可能な限りの補助をお約束しますわ」

その言葉に思わず心が揺れた。瞑目し、沈黙考する僅かな間。好奇心と危機感だけで言うなら、好奇心が上回る。奨学生待遇というのも魅力的に思う。

しかし、即応できるかと言われれば、それは難しい問題だった。瞼を開いた。

美帆と学園長の視線が無音の圧力を持って迫ってくる。

私は。

「少し考えさせてください」
保留を選んだ。

学園長は落胆を僅かに滲ませ、しかしすぐに相好を崩すと、名刺を取り出して差し出してきた。

「では、引き受けてくださる気持ちになりましたら、こちらに連絡をください」

私はそれを咄嗟に片手で取ってしまいながら、ぺこりと頭を下げる。

「すみません、お忙しいのに」

「いいえ、こちらこそ遅くまで引きとめてしまって、ごめんなさいね。もう授業は始まっているでしょう？ 学生の本分は勉強ですからね、頑張ってください」

二人は立ち上がってお辞儀した。

「では、失礼します」

「失礼しましたー」

ニコニコと笑いながら小さく手を振る学園長に見送られ、部屋を後にした。

美帆がもぐもぐと、やたら盛んに口を動かしていた。

放課後のことだ。

その可愛らしいと言いがたい食欲の犠牲になっているのは、何処からどう見てもタイヤキであった。

満腹堂という、タイヤキ、たこ焼きをはじめ、アイスクリームにラーメンといった多様な食を提供している店で先ほど購入したものだ。すでに頭の部分は胃へと消え失せ、今は背びれの辺りを咀嚼しているところである。

その光景を見ていると、立ち塞がる問題を蹴り飛ばして結論に縋り付きたくなる。

胸元を押さえ、なんとかその思いを飲み下そうとしていると、いつの間に食べ進めたのか、尻尾の部分を口からはみ出させて咀嚼し

ている。

唇を使って残りの部分を弄んでいた彼女は、一息にそれを口腔に納めた。

私と視線が合った美帆は、目を丸くした。

「何？　なんかついてる？」

不思議そうに頬に手を当てて、何か付いていないか調べている姿を見て「なあんにもついてないよ」と返してあげた。

美帆が一瞬、ムツとした表情を作るが、すぐに興味の対象は別の場所へ移った。

「ほら加奈、見てみて！　新作だつて！」

美帆はアーケードの反対側に立ち並ぶ店々の一つ、パステル文字でシャノワールと書かれた全面ガラス張りでおしゃれな雰囲気洋菓子店を指差し、そのまま店頭に張り出された新作紹介のポスターの元へ走っていった。

店員急募！　と書かれたチラシのすぐ横に張られた、桃とメロンを使った新作ケーキのポスターを見てはしゃぐ美帆を他所に、私は力なくため息を吐いた。

美帆とは別に、店員募集のチラシを見る。

時給七百五十円。休日は五十円アップ！

この辺りでは時給的には安いほうだが、駅前センター街にはスイーツのお店は若干少なかった。それよりも服飾関係のショップが断然多く、その時給も高めだ。

一本道を外れればおしゃれなカフェなどもあるが、それならば服飾店を選ぶ程度、といえば大体の時給は推定してもらえらるだろう。

もちろん私の性格もあるけれど。

金欠故に一人暮らしを断念し、寮生活を余儀なくされている自分にとって、贅沢とはなかなかできるものではない。

それを目の前で行う人間と行動を共にするというのも、精神衛生上あまりよろしくない負担を感じるのであった。

小躍りしながら店内に吸い込まれていった美帆の後姿を見て、再

度ため息。

「やっぱりバイト、引き受けてみようかなあ……」

携帯をポケットから取り出し、電話帳から一人の名前を探し出す。先ほど登録されたばかりの名前は、文字でありながらまるで墮落を誘い込む悪魔のようにも見える。

コンコン、と窓と叩く音がして視線を向けると、美帆がガラス越しに店内からこちらを呼んでいた。座っているテーブルの反対席を指差しながら、何か口で文字を作っている。

早く中に入って来い、と促しているのだろう。

ひらひらと手を振って携帯を閉じると店内へ入る。と、すぐに空調の効いた涼やかで甘い香りに包まれた。

知らず、ほうと息をついて、美帆の手招きするテーブルまで移動する。

席に着いた私に、早速とばかりに美帆が話しかけてきた。

「ねね！ さつき携帯見たのって、アレ？」

そのアレが差すものが何なのかわからない、なんてことはない。

私たちは、一緒にその話を聞いたからである。

「アイツもヤなやつだよねえ。ちよつとくらい見逃してくれたって、バチは当たらないっつーのに」

美帆の言うアイツとは、地下で出会ったあの男のことだろう。

助けてもらったお礼と、勝手に中へ入った謝罪を鼻であしらわれたとき、私は驚いて硬直しただけだったが、美帆は露骨に眉を顰めていた。

「しかも、あんなやつをサポートなんて。あーもう、無理無理！ 断つとして正解だよ！ 加奈もさっさとお断りしたら？」

玲二君の手助けをして欲しい。

正直、私も苦手なタイプだ。

せつかく寮暮らしで煩わしい親元を離れられたというのに、またしても苦手な人間と付き合わなければならぬというのもおかしい話に思う。

しかし、手助けの内容が詳しくわからないまでも、奨学生待遇
この場合、寮費の免除と奨学金の配布　のメリットは、私にと
ってあまりにも強烈な誘惑である。

美帆は親に反対されるわけでもなく、むしろ背中を後押しされる
形でこの学園に入学を果たしたこともあってか、親からの仕送りは
それなりのものがあるだろう。

この違いが、今日の惨状を招いていることは一目瞭然であるだっ
た。

それに、あの地下での体験はなかなか衝撃的だった。

彼の手助けをする、ということとは、再びあのような事態に遭遇す
ることが十分あり得るわけだろう。それがこの件を引き受けるのを
思い留まらせる理由の一つにもなっているのだが、しかし同時にあ
の防空壕に対する好奇心が存在するのも事実である。

そうなると美帆の言うとおり、相手の性格的な問題がこの一件を
躊躇するのに一番大きなウェイトを占めていることになるのである
が。

とはいえ。

「お待たせいたしました。こちら、桃とメロンのミルフィーユでござ
います」

ウエイトレスの見本のような態度で、注文したケーキを運んでき
た店員が「ごゆっくりどうぞ」と一礼して去っていく姿を見るとも
なしに見つめる。

三層重ねになったパイとクリームの上にコーティングされたカッ
トメロンが乗っている。

美味しそう。

銀のフォークを手に取った美帆が、テンション鰻登りの様子でミ
ルフィーユを分解し、その一切れを串刺しにしてこちらへ向けた。

「ん。おいしいよ、食べてござらん！」

「いや、あんたまだ一口も食べてないでしょ」
とか言いつつ、お言葉に甘えてばかり。

さくさくの生地挟まれた、程よい甘さの桃果肉inメロンムー
スは絶妙で。

同じフオークで次の一切れを口に運んでいる美帆を見て、やっぱり引き受けようって、そう思った。

それが昨日のこと。

善は急げと、そのまま承諾の電話をかけ、学園長から「では、早速明日から」と言われ軽くテンパったりもした。お風呂に沈みながらアイツの顔を思い浮かべて唸ったりもした。

兎に角。

今日の放課後には例の男と会うことになっているわけで。

黒板に英文を書き付けていた教師が、教室備え付けの時計を見やる。釣られて視線を動かしてみると、授業が終わるまであと五分程だった。

最後の英文の訳を説明し終わると、再び時計を窺いながら次回の授業予定にして口にした。それを聞き流しつつ、訳文までノートに写し終わるとチャイムが鳴ったのは、ほぼ同時のこと。

教師は手短に授業の終了を宣言すると教室から出て行った。

授業前後の挨拶をしない教師は、この英語教師と現文教師だけである。

「んあー」

両手を広げて大きく背伸びをする。同じ姿勢で長時間書き取りをしていたせいで、体中が鈍い疲労感に苛まれている。

荷物を纏めて教室を出て歩いていると、背後から美帆が現れ

こちらに気づかないまま走り去っていった。

どつやら今日は部活らしい。

一年生は全員、いずれかの部活に入らなくてはならない。

なんていう制約はないが、高校生ともなれば帰宅部にその身を甘んじている者など一握りである。その一握りの一人である私も、今日からは寮に直行する生活ではなくなったのだ。

一旦ロッカールームに鞆をおいてから実習棟へ向かう途中。渡り廊下に差し掛かったときだった。

腕組みをして壁に寄りかかっている男子生徒が一人、剣呑な雰囲気やを放っていた。少々浮かれ気味で歩いていた私は、それに気づくのが遅れ、思わず立ち止まってしまった。

忘れようとも忘れられないその生徒は、あの日出会った男子生徒だったわけである。

どつやら俯き気味に目を閉じているらしく、こちらに気づいた様子がないので、事前に聞いた学園長情報を脳内プロフィールから引っ張り出して、照らし合わせてみることにする。

名前は北条玲二。二年生。私の一個上で、一組らしいので特待生のようだ。ちなみに二組から六組までは基本的に成績順に割り振られ、私は残念ながら六組だった。

一年のときにはサッカー部でエースだったというから驚きである。運動神経抜群、成績優秀、その上見た目も悪くないときている。

これでモテないわけがない！

確かに改めて見てみると、背はそれなりに高いし、サラサラな短めの髪も清潔感がある。足もスラッと長く、顔のパーツは可愛い系というよりはカッコイイ系だし、控え目に判定しても、十分な美男子である。人気投票でもすれば、上位に食い込むこと間違いなし。

ただ、一番問題なのは、その性格ではあるのだが……今考えてみれば、進入禁止区域に入ったのは自分たちだから、厳しい対応をさ

れたのは当然である。

となれば、あれがデフォルトではないはずだから、物腰柔らかになるとポイント急上昇である。うっひゃあ！

などと考えながら観察していると、突然目が合った。

いつの間にかこちらに気づいていたらしい。

先ほどまでの多少邪な思考のこともあって、悪いことをしたわけでもないのに、何故か大量の冷や汗が出てきた。

無言で見詰め合うこと数秒。

「…………お前」

「な、なにっ？」

緊張のあまり声が裏返ってしまったが、玲二は気にした様子もない。

「俺の手助けをするのが、お前の仕事だったな？」

言われて、そういえばそんなこともあったと思い出す。

そうだ。これからのパートナーを観察していただけなのだ。お互いのことを知らなければパートナーが務まるわけがない。悪いことなんてこれっぽっちもないのである。

開き直りのような思考の結果、少し気持ちが落ち着いていた。

「あ、そうですそうです」

愛想笑い混じりに笑いながら返事をする。

抑揚の乏しい、まるで水のようにさらさらとした声音で、彼は続けて言った。

「以後、俺に関わるな」

「……………は？」

関わるな、ということとは、ええっど…………？

「お前みたいなのにつるちよろされても邪魔なだけだ。報酬は変更されないから、もうこれ以上この件に首を突っ込んでくるな」

あまりの拒絶っぷりに、脳みそどころか体ごとフリーズした。

言いたいことを言い終えた玲二が、踵を返して去っていく後ろ姿

を、ただ呆然と見送った。

……………何、今のって…………。

「どういうこと？」

私の呟きは、誰にも聞かれることもなく宙に溶けていった。

前言撤回。

やはり、一番の問題は性格だった。

反芻してみれば、これは何のトラップだ！　と言わんばかりの高待遇である。

玲二に関わらず、かつ例の地下道を口外しないだけで、寮費は無料だし、奨学生にもなれる。諸手を上げて喜んでいいところかもしれない。

だけど。

「それで簡単に納得できるわけないじゃん」

明らかに馬鹿にされて、迷惑がられて、情けまでかけられるなんて、とんだ屈辱だ。自己中野郎め。こんなので納得できるわけがない。

長年両親を相手にして折れていた反骨精神のようなものがメラメラと燃え上がった。

見てろ、ぎゃふんと言わせてやる。

玲二が向かった先は実習棟。

ということは、おそらく例の地下へ行っただろう。

私は燦然と目を光らせながら入り口へ向かった。

だが、しかし。

「　　ない…………」

確かな位置を記憶していたわけではないが、そう遠くない過去のことである。

忘れるわけがない。

なのに、いくら探そうとも黒い扉はおろか、奥まった通路すらなかった。

実習室と準備室が規則正しく並び、通路が入る余地もないのである。

なんだか眩暈がする。

まさか、今までのことは夢？ 白昼夢？ そんな馬鹿な、誰か嘘と言って！

同じ場所を何度も行き来し、丹念に調べた結果。諦めた。

「どづいづいと……」

#0003 「遊弋」

「こちらK。配置についた。応答願う」

「……こちら美帆」

「自分の名前はコードネームで言うように」

「はあ……こちらM、配置についたよ」

「了解した。では、これから作戦を始める！」

「ねえ、これやめない？ 超ハズいんだけど」

翌日。

廊下の柱の影に隠れた私と美帆がそこにいた。

携帯電話をトランシーバー宜しく、それっぽい行動を取っている私たちを、二年生がまるで珍獣を見るような目で見つつ通り過ぎていく。

「美帆隊員。この程度で恥ずかしがっているのは、任務は遂行できないのだよ」

美帆が大げさに嘆息してみせる。

「私は別にどーでもいんだけどなあ」

それを努めて無視し、こそこそと歩を進める。

階段を登ってすぐの教室が一組のものである。次に移動教室などがなければ、ターゲットはここにいるはず……。

そつと教室の中を伺ってみるが、ターゲットの姿がなかなか見つからない。

そんな私に奇異の視線は集まる一方だった。

怪しい一年生二人組。

美帆は恥ずかしそうに俯いていたが、私を見捨てて逃げ出したりはしなかった。付き合つと約束した以上、最後までキチンと付き合つてくれるのが美帆の性格なのである。

そんな私たちの様子に気づいた一組の女子生徒がこちらに近寄っ

てくる。愛らしいという言葉がよく似合う少女だ。先輩だけど。

「あら、あなたたち見ない顔ね？ 誰かに用事？」

「あ、はい。あの、れ……北条先輩って、今いますか？」

危ない危ない。憎しみの余り、玲二と呼び捨てにしてしまうところだった。

しかし、目の前の耳聡い少女先輩は、それをオカシな方向に勘違いしたらしい。途端に目付きが剣呑になり、声にトゲトゲしいものが混ざる。

「ふうん。玲二君ね」

言って、教室の中に視線を巡らして、そのまま私のところに帰ってくる。

「残念だけど、玲二君、いないみたい。残念ね」

少女先輩は何故か嫌味たっぷりに一語一句切りながら、玲二君を強調してくる。

意味がよくわからない。

特にその辺りに関心のない私は首を傾げながらもお礼を言った。

「あ、そうですね。ならしょうがないか。わざわざありがとうございます、失礼しますね」

さっと立ち上がって「美帆、行こっか」と言うと、美帆がムンクの叫びみたいな顔になった。

せっかく綺麗な顔立ちをしているのに、美帆にそんな顔は似合わないと思った。

意味不明である。

「そ、そうね。ホントにすみませんでした。失礼します」

美帆はやたら低姿勢にペコペコ頭を下げ、私の腕を掴むと強引に引っ張った。

「ちょ、美帆なに？ どうしたの」

「どうしたもこうしたもない！ 早く！ 走って！」
とりあえず困惑気味についていく。

階段を駆け下り、遠ざかったところで美帆は立ち止まった。長い

栗毛をぐしゃぐしゃを掻き混ぜて私を睨みつける。

「加奈、あんたバカじゃないの!? あの人の顔、見たでしょ。あれ絶対勘違いしてるよ!」

それに眉を寄せた私に、美穂は呆れつつ鼻を鳴らす。

「しかも私の名前出すし。あー、最悪」

「ねえ、どういうこと? まずいこと?」

美帆が目を丸くした。

「ほんとにわからないの?」

「だからそう言ってるじゃん」

「あー、まあ」

二人は教室に戻る道すがらヒソヒソと囁きあう。

「あの人たぶん、北条先輩のファンだよ。性格があんなでも、顔があれだからね。結構人気あるんだよ」

「それは、ええつと……まずい? ね……?」

「まずいね? じゃなくて、まずいのよ! まあすぐにすぐ、何かあるとは思わないけど……うう」

そもそも今回の件は、初仕事で業務停止命令を受けたのが始まりである。

それを美帆に話して「理由を聞き出したい」と言い出したのは私だ。まあ、本人がいたとしても、あの状況下と美帆の言うことを考えると、聞き出せたとしても困った事態に発展していた可能性もある。

「ねえ、教室までいなくても、放課後に実習棟辺りで待ってればそのうち来るんじゃないの? それじゃだめなの?」

美帆が疲れた様子でそう言う。

思わず手を打つ。その手があった。

「そっか! 別にあの中に入れてなくてもその前で待ってればいいのよね! なるほどねえ、さすがは美帆参謀さまさまだわ」

何故か隣で美帆が頭を抱えた。

「……今日も部活だから付き合えないんだけど」

それを聞いて、私はこれ以上なくらいに、ニコニコとしながら言った。

「平気平気。しっかり思い知らせてやるんだから、期待して待ってよ！ はあ、放課後が楽しみだわ」

「私は不安だわ」と美帆が呟いた。

空は白い絵の具を広げたようだ。

廊下の縁に腰をかけながら空を見ていた私は、そんなことを思った。

詩的だ。いい。

授業を終えた校舎は薄いざわめきに包まれている。実習棟からはグラウンドが遠いため、さすがの風もここまで威勢のいい掛け声を運んでこない。

時折、お喋りしながら行き交う生徒の活動音だけが満ちている。

私がそうして和やかな時間に身を委ねていると、渡り廊下に件の人物を発見した。鞆などは持っていない。制服姿で手ぶらの様子。

私は立ち上がると、廊下の真ん中で仁王立ちになった。

気だるげに歩いてくる玲二が、こちらに気づいて足を止めた。

「何か用か？」

先手を取ったのは向こう。負けてなるものかと、腰に両手を当ててふんぞり返った。

「昨日、私のことを邪魔だって言ったわね」

「ああ……事実を言ったただけだが？ それがどうした」

「……私のこと知りもしないくせに、どうして邪魔になるってわかるのよ」

その言葉を聞き、玲二の顔に嘲りが浮かぶのを見て、ついムツとしてしまう。

「犬畜生相手に悲鳴上げて逃げ回ってたくせに、どの口が役に立つって言うんだ？」

「そつ！ それは、誰だってあんなのが突然向かってきたらパニくるわよ！」

「だから役に立たないと言ってる。間違ってるか？」

「そうだ。手助けする以上、あんな獣と相対することだつてありえる。だがあれは突然の出来事で、武器も心も、準備が整っていないかつたせいだ。」

今はあの時とは違う。

危ないこともわかっているし、ただ逃げるだけじゃ終わらせない自信はある。

「あのときとは違います」

決意を伝えるために、意思を込めて睨むように視線を投げつける。

玲二は鼻を鳴らした。

「着いて来い」

玲二が私の横を通り過ぎ、慌てて振り返ると、実習室と実習準備室との間に細い通路があった。明らかに先ほどまでなかったはずの通路があつて、私は思わず目を瞠った。

玲二は懐から鍵を取り出し、南京錠を取り外すと雁字搦めになったチエーンを解き、それらを廊下に投げた。

「あの……せ、先輩」

玲二は返事もせず、扉を開くと中へ入っていった。

「ま、待ってよ！ あれ放つとして平気なの？ 誰かに見られたら「お前たちみたいに中に入ってくるって？」

嘲るような挑発のそれに、あの日の無謀な行為が過ぎり、羞恥が走った。

そんなこと既に終わったことなのに引つ張ってくるなんて、陰湿なやつ。

「その心配はない。まあ……」

玲二はそこで言葉を切り、歩を進めて小部屋に入った。

部屋の隅に置かれた少し大きな箱を鍵で開け、中からあのときに見た長剣と拳銃を二つ取り出した。

そのうち一つをこちらに放る。

「使え」

「え。えっ!? こ、これって、ほほほ」

「本物だ。どうやってアイツら追い払うつもりだ?」

言われればその通りであるが、まず木刀とか、順序というものがあるのではないか。しかも、本物の拳銃を持ったことなど始めてのことだ。小さくて軽い。まるで玩具のようだが、これは本物なのだ。身震いがした。これが命を容易く奪ってしまうのだ。

「反動が少ないから使いやすいはずだ。装弾数は十二発。残りの弾数はよく覚えておけ」

言いながら、玲二はスケボーっぽいものを引っ張り出している。

足を乗せ、階段に前車輪をかけたところで振り返り、手招いて私を呼んだ。

「え……やだなあ、そんな……まじ?」

「早く来い。置いていくぞ」

慌てて横に乗ると、玲二は壁面についたパネルのようなものを操作し始めた。こんな気づかなかった。

「しっかり捕まってる。途中でボードから落ちたら死ぬぞ」

それを聞いて私が慌てて玲二の腰にしがみつくと、階段が一齐に畳まれて斜面になった。私たちが乗ったボードが、その上を凄まじいスピードで駆け下り始める。

ジェットコースターは好きです。でも、これは嫌いだ。

ジェットコースターは安全であることがわかっているからこそ楽しめるのだと、私は悟った。

「にぎやあああああ!」

加速感。

疾走感。

風がうねる音。

急降下するときのような、背筋が粟立つような感覚。

腰の痺れるような恐怖が前方から後方に突き抜けていく。

私の絶叫はしばらく続いた。

歩いて十数分ほどはかかった距離が、まさにあつという間だった。

地下に到着してからもしばらくの間、私は放心状態で壁に寄りかかっていた。

間違はなく口から魂がぶかぶか浮いていただろう。

その間に玲二は着々と準備を進めている。

「ここで待つてるか？」

準備ができたらしい玲二が聞いてくる。

ハツとして、私は「行く！」と鼻息荒く返事した。

その私に、彼は折りたたまれた紙面を渡してくる。

開いて見ればそれは地図だった。

地図の端には、左上から順に、縦に1から10、横にAからJまで振られている。

「ここがE9。今日はC7付近の巡回を行う予定だ。俺の後ろからついてきて、曲がり角でルートを指示しろ」

なるほど、それくらいなら容易いことだ。

玲二はあー言っていたが、矢面に立たなくてもいいのならそれなりの役には立てるだろう。

私は自信満々に頷いて見せた。

「じゃ、最初の十字路は左ね！」

かくして、アイツとワタシの、初めての防空壕巡回が始まったのである。

途中、二度に渡って、前回遭遇した四足獣が現れた。

凶暴な面構えをしてうなり声を上げる姿は恐怖を誘ったが、今回は前面に玲二がいる。

彼は危うげなく獣を一刀の元に切り伏せてしまい、私のあの苦労はなんだったのかとショックを受けた。

絶命した四足獣は、しばらくすると泡立ちながら溶け消えてしまう。その光景は前回美帆と共に見ているので驚くほどのことはない。ただ、ハンカチで口元を覆った。

どういうプロセスで肉体が溶けてしまうのかはわからないが、その際に揮発したかもしれない何かを吸い込んでしまったらと思うとひどく嫌な気持ちになるのだ。

残された体が全て溶けると、獣がいた場所には玲瓏な丸い珠が転がっている。

それはビー玉ほどの大きさをしていて、これを回収して学園長に提出することで追加の報酬が発生するのだとか。

……私、それ聞いてないけど。でも口には出さない。

ただ後ろからついていくだけの私が、実際に働いている玲二から報酬を掠め取るのはよくないことだ。

「おい」

考え事していた意識が、呼びかけに反応して体に戻ってくる。

「は！ はい、なんですか先輩」

玲二はそれに応えず、視線を巡らせた。それだけで悟る。

「あ、えっと！ えーと……次、左ね」

言ったとおり左の通路に進みながら、玲二が鼻を鳴らす。ムツとしそうになるが、今は私が悪い。

反省である。

しかし、しばらく進むと丁字路のはずが、直線方向と右方向へ細かい通路が伸びる三叉路なのを発見してしまった。

なんと！

地図が間違っている！

「あの、先輩？ 地図が間違ってるんだけど……」
その言葉に玲二は足を止め、こちらを一瞥した。

冷たく、一言。

「お前の頭の中が間違ってるんだ。地図のせいにするな」
なんですと！

あれ、もしかしてさっきぼーっとしているうちに道を間違えてた？
「道間違えてた……？ なんて言ってくれなかったんですか？」

「 ついてこい」

玲二は呆れた声で告げ、右に続く通路に入っていく。気づいていたらなら教えてくれればいいのに。なんだかムカムカしてきた。

暗く、細い通路はすぐに終わって、丁字路に突き当たる。

「ここを左に進むとまた丁字路がある。そこも左に曲がって、三叉路を直線に進めば最初の十字路だ。わかったか？」

「うえっ。ちよ、ちよっと待って！」

慌てて地図を広げなおし、指先で通路を追いながら現在地を探る。
なるほど、ここか。ということは。

「知らない間に一度左に曲がってたのね……」

「三叉路の形状が違うことにまず気づけ」

言われればその通りである。三叉路が丁字路だった時点で気づけば迷っていなかったはずである。それに玲二が地図を暗記していなかったら現在位置がわからなくなってもおかしくなかったのだ。

もし、玲二が知らない場所だったら……。

携帯を取り出してみる。圏外。迷って場所がわからなくなっても、助けに来る人はいない。

ゾツとした。

「あ、あの、さっきはごめ」

「もういい」

私の言葉を遮って、玲二はさっさと先に進み始めた。

先ほどと違い、今度は虚しさが胸を突いた。

任されたことも満足にこなせないのか。

そう罵られたほうがマシだと思った。
それすらもない。

玲二に現在位置がわかったのは、入り口の近場なこともあるだろうが、きっと私のことを信頼していなかったからなのだ。
いてもいなくても一緒。
役立たず。

頑張っていたつもりが、空回りして迷惑までかけている。
滲みかけた涙を拭くと、先へと進む玲二の後姿を追いかける。
まだ終わってない。せめて最後までしっかりやりたい。

三叉路を直進し、十字路を右に折れる。視界に、あの扉が飛び込んできた。

帰ってきた。

中に入って扉を閉めると、玲二がこちらに向き直って口を開いた。
だが、私は「やはり邪魔だった」と言わせる前に先手を切った。

「あの！ この地図、借りていいですか！ 明日までに絶対覚えてくるので、今度は何処に行くか教えてください！」

玲二は眉根を上げ、口を閉じた。

数拍の静寂。

「B5だ」

よし！

「ありがとうございます！」

きっと今の私の評価はマイナス点だ。

だけど、チャンスはもらえた。

それはつまり、見放されていないということ。

ここから挽回して、邪魔なんかじゃないって。役立たずじゃないんだって、認めさせてやるのだ。

それが叶ったなら、きつと……。

満面の笑みを浮かべた私を、玲一が透明な感情を浮かべて見ていた。

防空壕は大きく分けて八つの区画に分類できた。

扉から続く主線を中心にして左右四つずつ区画が伸び、区画内で通路が広がっている形だ。

区画同士は繋がっておらず、帰るときや別区画に移動する際は必ず主線に戻ってこなければならぬ。

主線は一本。

各区画へ繋がる道も一本。

つまり、各区画に通じる入り口付近の形状を覚えてさえいれば、区画内で迷ったとしてもそのまま永遠に抜け出せなくなるわけではない、ということだ。

その事実気づけば、この防空壕の地図がさながら巨大な蟻の巣のように映るのだった。

実際にどのルートを通るかは任されているのだから、なるべく多くのルートを辿るように設定して、それを覚えておけばいい。

防空壕の基本的形状をマスターした私は、そりゃもう放課後が楽しみで仕方がなかった。

夜遅くまで地図と睨めっこする私を、美帆は最初はとても心配していた。

そして次の日には呆れ顔になっていた。

まさか玲二も、たった一日で地図をマスターしてくると思っていなかったら。

颯爽と地図を突きつけ「もう覚えたので必要ありません」と尊大に胸を逸らしてやろうと考えていた。

まあ、念のために近くのコンビニまで行って地図のコピーをしたのだが。

学校で地図をコピーするためには生徒会室か放送室、もしくは職員室に行かなければならないのだが、何処でコピー行為が露見する

かわからないので、慎重に慎重を重ねた結果だ。

そして待ち望んだ放課後になり、スキップしながら防空壕に向かった私の前に、それは立ちはだかったのだった。

私が玲二にしてやろうと思っていた、尊大に胸を反らせ、腰に手を当てた仁王立ち。それと全く同じポーズで渡り廊下を塞ぐ三人の少女。同じ学校だし何処かで見たような気もするが、残念ながら思い当たる節はない。

私そのまま脇を通り過ぎようとすると、その眼前に一人が横にずれて立ちふさがった。

どうしたことが。

目標は私だったのか。

不穏な気配に訝しみながらも足を止めた。

「あなた、一年六組の柚木加奈でしょ？」

こちらが質問する前に先手を取って話しかけられた。

それは質問の形式を取ってはいしたが、相手はこちらが当人と確証を持って話しかけている雰囲気だった。

それに、六組と言ったところで、明らかな侮蔑を持って鼻を鳴らされた。

ノータリンで悪かったな。

とは思うが、もちろん態度には出さない。

「は、はい。あおう、なんででしょうか？」

私は生まれたばかりの小鹿の如く震えながら上目遣いに少女を見た。

茶髪カール、黒髪ストレート、茶髪ボブの三人。

先ほど質問したのはカール頭のようにだった。

少女たちはお互いに目配せを交わし、なんらかの疎通を図った。

同級生ではなさそうに思う。二年か、三年か。

学年毎にパツと見てわかる制服違いなどは存在しないため、皆目

検討もつかない。

真ん中の子が一番かわいい。

小さな顔に大きな目　化粧込み　で控えめに塗られたリップ
が花を添えている。

よくよく考えてみれば真ん中は昨日見た少女先輩だった。どうりで背が小さいと思った。

ということは、横の二人も二年だと推測できる。

瞬時にそこまで考えながら、半歩足を引いた。

思い違わず、三人組は開いた間を詰めるように踏み込んできた。

こちらが怯えた素振りを見せることで、彼我の優位性の認識をより強固に印象つける。それは事実、相手の見縊った視線と横柄な態度が物語っている。

「あなた、玲二君とどういう関係なの？」

「面白半分で付きまとして彼が迷惑してるの、見てわかるでしょ？」

「しかも六組だなんて。あなたが付きまとしたせいで彼の成績が落ちたらどう責任とるつもりなの？」

「そんなことになったら自主退学しかないでしょ、常識的に考えて

「その前に、六組なんだし授業についてこれなくなつて顔も出せなくなるでしょ」

「あは、言えてる」

「ちよつと尻軽。聞いてんの？　玲二君に付きまとう暇があるならさつさと帰って無駄なお勉強しなさいよ」

「それ言いすぎじゃない？　お部屋に帰ってピーピー泣かれたらどうするのよ」

「どうもしないわよ。そのときはもう学園に出てこなくなるだけでしょう」

「かわいそー」

喧々囂々。

美帆が言った、嫌な予感的中した。

彼女たちは自分の優位性を疑わない。
それでいてその立場を知らしめるために小鳥のように囀るのだ。
群れなければ行動も出来ないくせに、他者を排除しようとする。
まるで小動物のように、追い詰められて威嚇する、哀れな生き物。
心の中だけで嘲弄する。

何この人たち。

可哀想って、そっくりそのまま返してあげるわ。あなたたちは頭が可哀想ですね、って。

大体、わかりやすすぎだつーの。

「聞こえないの？　なんか言えよ」

少女先輩が苛立たしげに私の肩を押してきた。それが予想以上に強くて、思わずよろめいてしまった。

小さく悲鳴。

軽くたたらを踏んで尻餅をつく。お尻痛い。

思った以上に反応を示さなかったことに少女先輩他二名は不満顔だ。

私の不遜な態度が気にいらないうで、眉を寄せて睨みつけてくる。

少女先輩は眦を上げたまま、片方の人差し指で組んだ腕を、トンと叩き始めた。

私は怯えたふりをして体を守るように縮め、上目遣いに観察を続けた。

相手からすれば無力でか弱い後輩にしか映らないだろう。

でも、これがある種の虚勢であることは、私自身が一番わかっている。けれど、原因と対策が分かっている以上恐ろしくはない。

最も恐ろしいのは、何故イジメられるのか、何故疎まれていのか、かがわからない時だ。わからない、理解できないことは、それ自体が不安と恐怖を齎す。そうなってしまうえばパニックになって、身動

きが取れなくなる。

そしてそれは、第三者による解決を見ても、根本的な解決になることが少ない。イジメの原因が他者ではなく自身にあった場合、それは結果的に何の改善もなされていないからである。

それを考えれば、この状況は随分と余裕（、）だ。少なくとも、小学生ときのそれ（、）に比べれば。

怖くはあっても恐ろしくはない。それはけれど、恐怖を感じないと同義ではなかった。

「何こいつ、ちょー生意気なんだけど」

「桜が怖いからじゃんねえ？」

「そーそー。震えてんじゃん、かわいそー」

あははは。

ちつとも可哀想と思ってなさそうな笑い声を上げながら、少女たちは僅かに動いて私を囲い込むような位置取りになった。

桜ね。桜。二年一組の桜。よし、覚えた。

他の二人はわからないけど、最低一人覚えればいい。

あとは芋づる式に掘り出せる。

大事なのは反駁できぬほどの情報だ。

何処の誰が何をしたか。

相手はイジメをする方。

私はイジメを認める方。

だけど、イジメを判断するのは第三者なのだ。曖昧さは出来うる限り排除する。

「あたしらが暖めてあげるわよ。ほら、水のほうが暖かそうじゃない？」

「それいいかも。私らちょー優しくね？」

「確かにー」

茶髪女二人が明確な悪意を持って手を打った。まるでそれが自明の理であるかのような軽快さで。

二人の足音が私の背後に回る。背後には男子トイレと女子トイレ

があり、その外に清掃用らしい水道とバケツがある。知っていた。

深く取られた流しには、清掃後に片付けるのが面倒だからと、いつもバケツが置かれたままになっているのだ。

ザー。

バケツに水を貯める音が冷徹な響きで周囲に広がり始める。

ぞわり、と寒気が走った。

尻餅をついたまま動かない私に、少女先輩が詰め寄った。

「玲二君に今後一切近寄らないって言うなら勘弁してあげるけど」
高みから見下ろすようにして少女先輩が言う。

意味がわからない。どうしてあんなたちに勘弁してもらわないといけないのか。

こちらには切り札がある。

でもそれは、もつとも有効に使えるときまで取っておくべきだ。

今はまだ、体がぶつかってこけただけ、などと言いついで出来てしまおう。

それにここで切り札を使ったところで、内容が巧妙で陰湿になるだけの話。意味がない。

そういえば、物陰というわけでもなく、人通りが極端に少ないわけでもない場所なのに、先ほどから誰も通らないな……。

そんなことを思っていると、突然髪の毛を鷲掴みされ引っ張られる。髪の毛が抜けるかと思うくらい痛い。離せよこのやろう。将来ハゲたらおまえのせいだぞ。涙出る。

それでも私は喋らない。

しげしげと私の顔を観察する視線が、目を、鼻を、頬を、口を撫でていく。

言いよつた無の不快感。

沈黙が落ちる中、ただ確実に溜まっていく水音が決壊のときを着々と刻んでいる。

少女先輩は私の頭に手をやり、無理やり持ち上げた。しゃがみ込

んだ少女先輩の剣呑な視線が直に突き刺さる。

嫣然な微笑み。

次の瞬間、頬が熱を持った。平手で叩かれたのだと気づいたのは、倒れ付してからのこと。

衣擦れの音がして、少女先輩が立ち上がった。

「あんたみたいな女が付きまとうから、玲二君が冷たくなるのよ。いい加減にしてくれない？ 彼にもう近寄らないで」

その途端、微かに蠕っていた恐怖がスルリと抜け失せた。

愛らしい顔に見合わない台詞と声音だけど、ちっとも怖くない。痛いのは痛いし辛いけど、全然怖くない。

あの獣に噛み付かれるかと思った瞬間の、あの背筋が凍る感覚。本物の拳銃を持ったとき瞬間に感じた、命のちっぽけさ。

くだらない。

その程度のことです。

キュツと蛇口を捻る音がして、空から雨が降ってきた。

そんなことはない。

バケツの水が全身にかけられた。

新しく注がれた水道水だからか、汚臭はしない。冷たい。

このままでいたら冗談ではなく震えだしそうだ。

張り付く髪と服の感覚が煩わしく、滴り落ちる雫がうっとおしい。押し込められた哄笑が頭を、体を撫でて通り過ぎる。

「つめたそー」

「ねえ、大丈夫ー？」

「これに懲りたらもう彼に付きまとわれないことね」
言って、三人組は笑いながら立ち去っていく。

一人、ぽつんと取り残される。

何だ、この茶番。唐突で理不尽で、笑えて来る。

哀れな道化にも、それに付き合わされた自分自身も滑稽で仕方ない。

「ふ、ふふ。あはは」

一頻り笑って、体を起こすとポケットから携帯を取り出す。壊れてない。よかった。

これが壊れてしまえば、次の携帯を購入するお金がなかった。

私は少女たちの生み出した水溜りに沈んだまま、しばらく携帯のキーを入力し続けた。

「ということ、今日のお仕事は欠席します」

敬礼して言った私の、濡れたままの全身を上から下へ胡乱に眺めて、玲二が言った。

「で？」

フリーズ。

玲二の無感動な視線が、氷点下以下の冷気を持って私を打ち据える。

ただでさえ濡れた制服に奪われた体温が、増して下がる気がした。

「え？ あはは、嫌だなあ、先輩わからないんですか？」

「いきなり、というわけで、とかわかると思ってるのか？」

「あの……ええっと………ですよね」

用件はそれだけかとはかりに鼻を鳴らして、玲二は踵を返して黒い扉に向かおうとする。

私は慌てて彼の腕を掴んで、慌てて離れた。まだ濡れていた。

「あのあ……昨日お借りした地図、きちんと覚えたのでお返ししようかと思ひまして………」

調子が狂ってしまった。

腰を低くして言いながら、私はポケットから地図を取り出す。四つ折にされていたそれは、水分を含んでまるで一枚であるかのよう張り付いていた。

意図せず頬が攣った。

これを持っていたことを忘れていた。

それを玲二が冷たく見下ろす。

「か……」

咄嗟に地図をポケットに仕舞い直して隠蔽を図る。

「借りたままじや悪いんで代わりの地図持ってきますうう!!」

私は脱兎の如くその場を逃げ去り、ロッカールームに駆け戻った。サンダルシューズがぺちよぺちよと音を立てる。

ちらほらと行き交う生徒が何事かとこちらを見た。

その視線が「係わり合いたくない」という意思を持って離れていくのを努めて無視する。

小さな錠前がつけられているロッカーには手を出さなかったようだ。もしロッカーが凹んでいたり、錠前が壊されていたら犯罪物である。さすがにそこまで可哀想な頭はしてなかったらしい。

手早く鞆から折りたたんだ真新しい地図を取り出して、鍵を閉めなおす。

駆け戻る。

実習棟には玲二の姿はなかったが、例の扉は存在していた。私には見えるときと見えないときがあるので、これで扉が見えなかったら憤慨ものだっただろう。

扉の前で立ち止まり、僅かな時間で呼吸を整えた。

ロッカールームとは違う、大きな南京錠が外れていることを確認して、私は扉を開ける。

中に半裸の玲二がいた。

私はそのままの姿勢で硬直すると、満面の笑みを浮かべて、彼とつかの間視線を交わした。

そして 私はそっと地図を床に置くと、黙って静かに扉を閉めた。

水滴を散らしつつ、私はわき目も振らずに一目散に駆け出す。
玲二が追いかけてくる気配はなかった。

#0005 「拝啓」

ラブレターを書いた。

切々と思いを込め、余りに長くなったので二枚綴りになってしまった。

可愛らしい便箋だ。百円均一のレターセットだけど。

学年と組と名前をきちんと書き、お昼休みに屋上に一人で来てくださいと書き添えた。

ハート柄のシールで封をして、それを翌日、相手のロッカーに貼り付けておいた。

相手はもちろん、少女先輩である。

自慢じゃないが、人生初のラブレターである。

思わず気合が入った。

気合を入れすぎて、何度も書いては消しては繰り返し、すでに美帆が寝入るくらいに遅くまでかかって、ようやく書き上げた渾身の一品なのだ。

しかも相手が女性だなんて、禁断の愛を想像してしまう。

どのような反応が返ってくるか楽しみで、私は鼻歌混じりに授業を受けた。

その日の午前中は美帆だけならず、先生からも心配されたことは蛇足だ。

そしてお昼休み。空に雲はなく、陽射しが少し暑いぐらいの陽気だった。

私は屋上に置かれたテーブルの一つに腰をかけ、携帯を弄っていた。

屋上と言っても一面コンクリートなどではなく、人口芝の敷かれたテラスになっている。

三階渡り廊下の上に設けられたこのスペースには、同階の階段を

登れば誰でも来ることが可能だが、入り口は三つしかない。

大抵の生徒は第二棟の階段からテラスにきて、一棟二棟間の第一テラスか、二棟実習棟間の第二テラスのうち、ジグザグに配置されたテーブルの空いているほうへ移動することが多い。

第一棟は売店が近いので、そこからテラスに来る生徒もいるが、元より使用頻度のそこまで高くない実習棟側のテーブルには人気あまりない。

なので私が陣取っているのはもちろん実習棟側端っこのテーブルだった。

少し離れた位置で和やかに昼食を取る生徒たちの中、私は目の前に誰かが立った気配に顔を上げた。

「あ、少女先輩、いらっしやい」

「三上桜ですわー！」

少女先輩改め、桜先輩でした。

「これは一体何のつもりですか！ まるで脅は
テーブルに突きつけられたそれは、間違いなく私のラブレターだ。
物騒なセリフを、私は手のひらを差し出して押し留める。

「まあまあ、少女先輩。落ち着いて席に着きましょうよ」

少女先輩がしぶしぶといった様子で対面に座る。

そういえば少女先輩はご飯食べたのかな。手ぶらだけど。

「私のラブレター読んでくださったんですね？」

「こ、これの何処がラブレターなんですの？！ 脅迫文にしか見え
ませんわー！」

あれ、少女先輩ってこんなキャラだったっけ？ まあいいや。

「それは置いておいてですね」

「お、置いて……そ、そうですね」

「まずはお茶でも」

私は校内の売店前で購入しておいた三種類の紙パック紅茶をテーブルに並べた。

少女先輩は少し迷った後、莓果汁が入ったものを手に取った。

プツ。チュー。

コクン。

「ああ、当たりを引いてしまったか……」

私がボソつと言うと、途端に少女先輩が咽こんだ。一瞬、周囲の視線がこちらに集まった。

「やだ、先輩大丈夫ですか？」

優しい私が差し出したハンカチを無視して、少女先輩は自分のハンカチを口元に当てた。

若干、涙目になりながらこちらを睨みつけてくるが、少女先輩は外見が幼く見えることもあって、子供に凄まじれる感覚だ。なんだか微笑ましく思ってしまう。

「……あなた、一体なんのつもりなの？ 昨日の仕返しのもり？ 私ほわざとらしく驚いて見せた。」

「まあ！ 仕返しだなんて、とんでもない。今日は昨日のお礼にお誘いしただけです」

「嫌味？ 嫌味よね？」

「いいえ。ですから、昨日のお礼に少女先輩と北条先輩の、愛のキューピットになって差し上げようかと思いましたが」

少女先輩は目を丸くした。次いで顔を赤くし、最後に眉を寄せてこちらを睨んだ。

「あなた、私をバカにしてるの？」

「とんでもないです。可哀想な頭だとは思いましたけど」

「バカにしてるじゃない！」

勢いよく立ち上がった少女先輩の顔は真っ赤だ。余計に幼く見えるからやめてください。

「……私と北条先輩は仕事仲間なんですよ、つい数日前から。ぶつちやけ、北条先輩には興味ないんですけど、仕事仲間だからしょうがなく着いていつてるだけなんですよね。そりゃ、多少は私情込みですけど。とにかく、仕事上の付き合いにすぎないわけです」

「……それで？」

少女先輩は椅子に座りなおし、踏ん反り返る。

「仕事上の付き合いとはいえ、ある程度一緒にいないといけない身としたら、北条先輩のあの冷やかな目はもうヤバすぎです。ガクブルですよ！ わかりますか！ 一緒のクラスだったらわかりますよね！！」

興奮気味に私が言うと、少女先輩は若干気圧されつつ頷いた。

「玲二君も前はあんな冷たくなかったのよ。一年の頃からサッカー部のエースだったんだけどね、一年の終わりくらいに突然辞めちゃって……」

そこまでは私も学園長に聞いたので知っていたけど、黙って頷く。

「それから玲二君、夜のお店でバイトしてるとかバイト掛け持ちしてるとか噂になりはじめて、学校休んだり成績落ちたりでみんな心配してたわ。その頃から話しかけてもそっけなくされるようになったの」

ほう。夜のバイト……掛け持ち……。

「それって……」

「……先生方にも何度も呼び出されたりしてたわ。けど、六月頃から学校休まずに来るようになって、バイトも辞めたって聞いて、みんなで話に言ったの」

思わず突っ込みそうになるのを押し留めると、顎を引いて話を促す。

少女先輩の嘆息。

「玲二君、ちらつと私たちのほう見て『お前らには関係ない』って……。成績も学年首位に戻ったけど、サッカー部にも戻らないし、その頃からずっとみんなに冷たいのよ」

「へえ……」

「って、学年首位？ あれ、進学校だよな、ここ……。特待生一組の首位って、ちょっと頭良すぎなんじゃ……？」

「まあ、それで。それとこれが何の関係があるの？」

「ん？ ああ、えっと。つまり、あの性格が直れば、私が仕事する

上での心理的負担が減るわけですよ。やっぱり優しい先輩のほうがいいじゃないですか？」

「それはそうだけど……」

私は熱く、こぶしを握った。

「それですよ！ 少女先輩と北条先輩がくつついちゃえば、いくら北条先輩と言えども性格が軟化すること間違いなしです！ なんてったって少女先輩だし！」

「ちょっと意味がわからない」

「少女先輩は北条先輩と付き合えて、私は仕事の先輩が優しくなる！ ほら、どうですか？ 完璧でしょ！？」

「うーん……完璧、なのかしら？ そもそもどうして私なの？」

「何言ってるんですか。私と少女先輩の仲じゃないですか！」

少女先輩はそれに対して露骨に眉を顰めた。

「あの、そろそろその、少女先輩って言うの、いい加減にしない？ そもそも私、あなたと仲良くした覚えなんてないんだけど？」

「あっ！ そろそろ予鈴鳴りますよ、少女先輩！ これ、私のメルアドです。登録しといてくださいね」

用意しておいたメールアドレスを書いた紙をテーブルに載せ、私は立ち上がった

「ちょっと、あなた聞いてるの！？ 待ちなさい！！」

少女先輩も立ち上がる。

私は屋上を移動しながら、顔だけ少女先輩に向けて言った。

「昨日あんなに心と心で語り合った仲じゃないですか。私のラブレター、読んでくれたんでしょ？ 私も先輩のこと嫌いっていうわけじゃないですし、これから仲良くしましょうね？」

少女先輩は一人、心細そうに顔を強張らせて立ち尽くしていた。

話は簡単だ。

まず学園長とコンタクトを取り、仕事内容について口外しないことを条件に、学園長から仕事を依頼されたことを話してもいいことを確認する。

許可がもらえればあとはラブレターを書くだけ。

典型的なイジメを受けたこと。その原因が学園長から依頼された仕事遂行上、不可欠な部分にあること。警告されたことを実行しようとするれば、仕事を辞退することになった原因を学園長に話さなければならなくなる。

そして、これらのことについて相談があるので、昼休みに屋上まで来てほしいこと。

ラブレターの中身はこんな感じに仕上がっていた。

正直、少女先輩と玲二が上手くいこうがいまいがどちらでもいい。重要なのは、過激派の筆頭になっていそうな少女先輩をこちら側に引き込み、カップル成立が上手くいけば万々歳。上手いかなくても矢面に少女先輩が立つことで、私への被害は減る。

内部事情を多少なりとも知った少女先輩がある程度は私を守ってくれるだろうし。

少なくとも水をかぶっただけの見返りは得られたと思う。風邪もひかなかったしね。

という内容を美帆に報告したらドン引きされた。

「加奈って、見かけによらずえげつないわね……」

「しっつれいな！」

私にとってこれほどおいしい仕事を手放すなんて考えられないわけ。

バカにされたまま引き下がるのも癪なわけで。

負けず嫌いだから仕方ない。

これは仕方ない。

「まあ、イジメられてメソメソ泣いてるのも加奈らしくないけどさ。一生懸命なんかやってるから気になってたけど、想像を突き抜けて

たわ」

「でも話がすんなり通ってよかったよ。うちの親みたいなんだっ
ら、さすがの私もどうしようもないから……」

「ああ……」

頑固者の父親に分からず屋の母親。家族ですら辟易としてるのに、
似たようなのが増えられたら、冗談じゃなくストレスですごいこと
になりそうだ。

今は寮生活で顔を合わせずに済むから、とてものびのびしてい
れる。

まったく、美帆の両親と交換してほしいくらいだ。いや、それだ
と美帆が可哀想だから私が美帆の家へ養子縁組してもらえば文句な
し。

弟は……なんとかいい子に育ってくればいいかな……。

「加奈がそこまで言う親なら一度会って見たいけどね」

「あー、だめだめ。あの人ら、外面だけはいいいから。近所の人から
は『仲のいい家族で羨ましいわ』とか言われちゃってるし」

「しかしその実態は……ってやつか」

大いに頷いた私は、ふと思いついた。

「あつ！ そういえば、玲二が歳を取って頑固になったら、うちの
親そっくりに」

「俺がなんだって？」

私たちは揃って足を止めた。

放課後になって、二人で雑談しながら実習棟へ向かっていたのだ
が、いつの間にか到着していたようだった。

さすがにあの地下での恐怖体験に比べれば大したことはないが、
集団に囲まれるのが怖いことには変わりない。それを言わずともわ
かってくれて、ついてきてくれた美帆には感謝してる。

だけど。

「……じ、じゃ私、こころへんで……」

引きつった笑みを浮かべ、踵を返して逃げていった。薄情者め！
しかし玲二は美帆には目もくれず、私に冷たい視線を投げつけている。

冷や汗が垂れる。

「あ、ははは。さ、さて、今日も張り切ってお仕事しましょうかね！」

ギギギ、と音がなりそうなくらいぎこちなく視線を逸らし、例の黒い扉に向かった。

もちろん、私が先に行ったところで、南京錠の鍵は玲二が持っているので開けることはできないのだが。

玲二は私の脇を通り抜けて、さっさと鍵を外すと中に入っていく。真面目に玲二が何考えてるのかわからない。こ、これが学年主席と最下位編入の六組との差なのね！

「早くしろ」

「は、はいっ！」

慌てて中に入ると、装備を手渡される。ホルスターを身につけ、拳銃を差し込む。玲二はその間に、例のボードを取り出している。

「あのお……それ以外で素早く降りる方法ってないんですか……？」
玲二は顔だけをこちらに向けて、少し考えた後。

「蹴落とせば転がって」

「さあ！ 早く行きましょう！ 今日新しい冒険が私たちを待っていますよ！！」

玲二は反応もせず、ボードを階段にかけてパネルを弄っている。

私は恐る恐る横に乗ると服の裾を握った。

「ちゃんと捕まってる。ボードから落ちて顔が削れても知らないぞ」
私は慌てて玲二のお腹辺りに手を回した。

おお。意外と鍛えられてる……。
なんて思ったのもつかの間。

音を立てて平らになった階段上を、ボードが滑り降り始める。
すごい勢いで視界が流れ始め、耳元で風の唸る音がする。

私は玲二の背中に顔を押し当て、お腹に力を入れて必死に悲鳴を押し殺し続けた。

#0006 「知らぬ者」(1)

「そういえば、地図はもう完璧に覚えたと言ったな？」

「うえっ！？ か、完璧……なんて言いましたっけ？」

「なんだか悪い予感を覚えつつ言ってみる。」

到着した小部屋には最初の明かりが灯され、暖かなオレンジ色を広げていた。

玲二は顎に右手を添えて何か考えるそぶりを見せる。

「なんか様になってムカつく。」

「覚えているなら迷っても問題ないな。今日から俺が先行する。お前は後ろからついてきて宝玉　魔物から出る珠を拾ってついてこい」

「まってまって待つてええ！！？」

私は驚嘆して目を見開く。

「ちゃんと覚えてたら迷わないと……思うんだけど」

「ちょっとした反骨心も提示しておく。」

「つまり、迷ったときには既に手遅れ。」

「呼べばいいだろう。そのときは俺以外を呼び寄せないように注意しろ」

「や、無理でしょ、それ」

「って無視か！ 嫌なヤツだなほんと！」

「珠拾ってついていくだけですか？ 援護とか、なんかそういう」

「やめろ。俺を殺すつもりか」

「失礼ですね！」

「いや、確かにまだ一回も銃使ったことはないけどさ。他にもなんか、ほら。あるじゃん？」

その後移動ルートを簡単に説明される。英語と数字を使ったエリア説明を私流に解釈すると第一区画から順に第三区画まで巡回しつつ移動。その後休憩を挟んで第七区画から第五区画まで巡回してお

仕事終了、という流れだ。あれ、こっちのほう分かりやすい気がする。

「北条先輩。細かい分け方しなくても、真ん中の道から大きく分けて八つに分かれてるじゃないですか。これ、左下から上に向かって第一から第四。右下から上に向かって、第五から第八の区画分けて呼んだほうが簡単じゃないです？ B5とかF7とか、ごちゃごちゃしてわかりにくいですって」

私が自信満々に言うと、玲二が心底呆れたような顔でこっちを見下した。

このやろう、ちょっと背が高いからっていい気になりやがって。という私の視線を華麗にスルーして玲二が説明してくれる。

「アイツらの死体が残らないのはもう見ただろう。だから前の巡回で討伐したエリアに魔物がいる確率は低い。無駄に巡回ルートを増やすことはない」

……なんで死体が残らなかったら魔物もないの？ もうちょっと噛み砕いて説明してほしいんだけど……そんなことしませんよね、はい。私には話の繋がりがわからん。

とにかく、討伐したエリアは次回通らないって覚えとけばいいのね。

玲二がこちらをじーっと見てることに気づいて、私はなんとなく居住まいを直す。

物音がなくなっって、僅かな時間お互いを見つめあう形になる。

あれ？ と思ったときには、玲二は踵を返して防空壕に繋がる扉に手をかけていた。

「もし俺とはぐれたときに敵と会ったら、視線を逸らすな。背中を見せるな。銃を抜くな」

銃を抜くな？！

「俺を呼べ」

あ、はい。

「わかりました」

じゃあなんのために銃持たせたんだこの野郎。
とか思いつつ。

玲二が扉を開く。

冷やりとした空気が流れ込んでくる。

懐中電灯で辺りを照らし、安全を確認してから中に入る。

ランタンのスイッチを滑らせて明かりをつけると、周囲に光が広がる。数時間分の燃料が流れ込み、着火してくれる優れたものだ。思わず安堵の息を吐くと残りの燃料量を確認しておく。

いくら懐中電灯があっても、明度は心もとない。

明かりというのは、そこにあるだけで不安を拭い去ってくれる優れものだ。

玲二は早足で通路を進み、暗くなってくるとすぐ傍のランタンに明かりを灯す。私はその後を小走りで追いつつ、脳内地図で現在位置を検索して周囲の様子を観察しておく。

道沿いの物陰に伏せていた四足獣が起き上がり、威嚇しつつ向かってくる。

脇道から飛び出しつつ駆けて来る四足獣。

玲二はそれらを一刀の元に切り伏せ、そうでなくとも長剣で迎撃し、返し様に両断させる。めちやくちや強い。

剣の軌道が見えないとか、そういうファンタジーなまでの速度ではないものの、十二分に早く、そして力強いだろうことは分かる。

カボチャとか切らせたら便利だろうなあ。

なんて思いつつ、死体が消えるのを待ち、宝玉を回収する。ちなみに手袋装着の上、ティッシュも駆使して万全の体制である。

そんなことをしている間にも玲二はさっさと先に進んでいく。

私は宝玉を皮袋に突っ込むと、慌ててその後を追いかける。

そして追いついた頃にはまた別の四足獣を切り伏せているのだ。

呼吸を整える暇すらない。

いや、あるにはあるが、目の前で死体が泡立っている状況で深呼吸などする気も起きない。

玲二の後姿が消えないうちに追いつきたい。
でも宝玉がまだ出てこない。
出てきた。

拾って全力疾走する。
次の戦闘が始まっている。

というループである。

正直、調子乗ってました。

元々、玲二と私ではコンパスの長さが違うのだ。

私の体力が持たないのは至極当然の事実だったわけで。

第二区画の巡回を終えて第三区画へ向かう道すがら、私はとうとう玲二にストップをかけたのだった。

「あ……あの、すみま……せんっ！ ……ちょっと、ま……待って……」

息も絶え絶えに私が言うと、視線の先で玲二が足を止め、こちらを振り返った。

なんとか追いつくと、たまらず座り込んでしまう。酸素が足りない……。

「運動不足か」

文句を言う余裕もない。

確かにそこまで運動はしてなかったけど、それとこれは別だろう。走りすぎて脇腹が痛い。

玲二は私の呼吸が落ち着くまで傍にいてくれた。

長剣は鞘に収めているが、視線は周囲に油断なく向けられている。

例の四足獣 名前があるのか知らない は基本的に単体で通

路をうろついている。たまに二匹固まっているときもあるが、吠えて仲間を呼ぶわけではなさそうだし、観察した限りではそこまで強くなさそうだった。

もちろん、玲二が強すぎることもあるのだろうが、落ち着いてさえいれば私でも倒せそう。

倒すなんて言っているが、暴力的に言えば殺すということ。

死体が残らないだけイメージしにくいが殺害行為なのだ。いくら身の危険があるとはいえ、それが自分に来るかどうかはそのときになってみないとわからなかった。

わからないといえば、この防空壕っぽい場所がなんなのかさえ知らない。

ここにいてる犬みたいなのが、なんで切られたら消えちゃうのか。消えたらなんて珠が残るのか。

これがなんなのか。

そもそもなんで犬がいるのか。

ていうか、私らって銃刀法違反じゃね？

「行くぞ」

「あ、うん」

立ち上がる。玲二はもう先に進んでいる。質問できる雰囲気でもない。

まあいいか、と思い直す。難しいこと言われても理解できるとも限らないし。

私はバカではないけど、頭がいいわけでもない。

こつやって後ろついていって珠拾ってるだけで収入になる、という事実だけ分かればいい。

知らなくて困ることは、困ってから聞けばいいのだ。

ま、さすがに私もその日のうちに知らなくて困ることが起きるなんて、思ってもみなかったわけなのだけれど。

それが起きたのは第六区画の長い通路を走っているときのことだった。

第六区画の入り口部分はU字型に折れ曲がっていて、そこから東に向かって長い通路に繋がっている。

視界の先には既に遠くなった玲二の後姿があり、私はそろそろ重くなってきた腰にぶら下がった宝玉入れの皮袋を気にしていた。

その通路の途中にあった、用途不明の箱やらなんやらが詰まれた小さな袋小路に差し掛かったときのこと。視界の隅で何かが動いた気がして、私は足を止めた。

少し戻って袋小路を覗いて見ると、薄汚れた小さな袋のような物体がもそもそと動いていることに気がついた。

勝手に行動してはまずいかもしれない。私が玲二に一声かけようと視線を巡らせると、玲二の後姿はかなり遠く、大声を上げなければ聞こえなさそうに思えた。

そんなことをすればまず間違いなく、先に気づくのは玲二ではなく目の前の物体だ。

とりあえずジコチュー玲二は放っておいて、袋のようなそれを観察してみることにする。光の届かない袋小路の先は薄暗く、良く見えない。だが、何かがいるのは間違いなかった。

「誰かいるの？」

声をかけてみると、その何かは動きを止めた。ということは最低限の意思疎通は通じる相手だろうと予想できる。

「何してるの？」

一歩踏み込んでみる。

今まで魔物は、あの大型犬っぽい四足獣しか見てない。言葉が通じるということは、もしかしたらこの大きすぎる防空壕で迷ってしまった学園生かもしれない。

そう思えば躊躇いはぐっと減った。さらに近づくと、その布がこちらを向いた。

目が合った。

女の子だ。

臙脂色の裾がざろりと長いワンピースと菖蒲色の長い髪をまるごと覆うように薄汚れた布を羽織っている。顔は小さく丸く、見開かれた瞳は大きく輝いていた。十歳前後に見える。

かわいい。

いつもの私ならダッシュで駆け寄って抱きしめているところだけど、彼女の表情に浮かんだ驚愕と畏怖が、何よりこの防空壕の中という状況がそれを押し留めていた。

「……た」

「た？」

「助けて！ あたし悪いことしてない！ お願い！」

少女は顔を強張らせ、これ以上下がれないくらいに壁面に張り付いて言った。

「だ、大丈夫。何もしないよ？ 安心して？」

私は少しでも彼女の不安を減らそうと、優しい笑みを浮かべて手を伸ばしながらゆっくりと近寄った。

「止まれ」

否。止められた。

目の前の少女が、ヒツと息を呑んだ。

私が恐る恐る振り返ってみると、いつの間にか戻ってきていた玲二が長剣を構えた状態で立っていた。

「なっ！ 何やってるんですか？ それ下ろしてくださいよ、怖がつてるでしょう！」

食って掛かった私を、玲二は一瞥もせずに見視した。

「やめてくださいってば！」

両手を広げて立ちふさがった私を、ようやく玲二は見た。まるで羽虫を見るような目で。

背筋が震える。

それでも私は玲二を睨み返し、一步も引かない意思を見せた。

「お前が庇っているそれは先ほどの魔獣と同類だぞ。人を襲い害を成す存在だ」

「あ、あたしそんなことしてない！」

少女が震えた声で言うと、玲二が鼻であしらう。

「害されてからでは遅い」

私は愕然として玲二を見た。次いで背後の少女を見て、再び玲二に視線を戻す。

「それ、本気で言ってるんですか？ こんな小さい子にそんなことできるわけないじゃないですか！ それにこの子は人間でしょう！？」

「魔物だ。下手に自我がある分、魔獣よりよほど危険だ。どけ」

「どきません！」

冷気そのもののような視線を浴びるが、へこたれない。

「地下の全ての魔物を斃すのが俺の仕事だ。サポート役が、邪魔をするな」

「お、おかしいです、そんなこと！ この子が魔物だっていう証拠はあるんですか！」

「ゴゴゴゴ」

数秒間、睨みあいが続いた結果、勝ったのは私だった。

「もういい」

玲二は嘆息して頭を振った。

「もう面倒だ。勝手にしろ。ただし何があっても俺はしらん」

剣を納め、踵を返して通路に消えた玲二を見送って、私は安堵しながら振り返った。

少女は隅に小さくなってこちらを伺っていた。目が合うとびくりと身を竦ませる。

「こつ、来ないで！ そんなこと言って、昨日みたいにあたしを騙すんでしょ！ あたしは騙されないんだから、あっちに行って！」

昨日みたいに、とか、騙す、とか。不穏なセリフが飛び出して困惑してしまい、躊躇する。

直後。

ぐう、と気の抜ける音がした。呆然とする私の前で、少女はサツとお腹辺りに視線を走らせると顔を赤らめた。

お腹が鳴った音だった。

思わず破顔してポケットから飴を三つほど取り出した。

「大丈夫だよ。玲二は冷血漢だから、私が守ってあげる。ほら」
私が飴を差し出すと、少女は上目遣いに私と飴玉に視線を巡らせた。

「遠慮しなくていいよ」

それでもまだ思案を続けた少女は、しかし再度お腹がくうと鳴るに至って、ようやくおずおずと近づいてきた。

手のひらに転がった飴玉から苺味のものを取り、しげしげと眺める。

それが何であるか分かっていないような顔をしている。

「こつやって開けるんだよ」

暖かい気持ち体がとろりと流れ込み、私は思わず笑顔になった。
お手本にカシス味の飴を包装から取り出して口に入れる。

少女はそれを見て、同じように飴を食べた。

モゴモゴ。

ゴクン。

「え?!」

「なくなった」

「そりゃそうだよ！ これは食べるものじゃなくて舐めるものなんだよ」

「というか、良く飲み込めたね……」。

それを聞いてしょんぼりしてしまった少女に、残った飴を渡す。

「これもあげるよ。飲んじゃダメだよ?」

「あ。あり、ありがと……」

少女は恥ずかしそうに言って、飴を口に運んだ。

モゴモゴ。

「食べちゃダメだよ」

……モゴモゴ。

飲み込まずに口の中で転がしているのを数秒見て、私は笑った。

「ね、あなたなんて言うの?」

「……もほぼ」

「ああ、口に飴が入ってるからね……まああとでにしようか」

私は強引に手をとって歩き出した。少し驚いた様子を見せた少女は、しかし大人しくされるがままについてくる。

嗚呼、可愛いなあ。“イエス”も“ノー”も言える素直な子は大好きだ。

手を繋いだままで奥に進むと、三箇所左へ曲がる通路が並んでいる。どれも同じ場所に繋がっているのが最初の通路を入ると少し広いホールに出た。すり鉢状に広がったホールは数本の柱に支えられていて、玲二はその真ん中で四足獣を切り伏せたところだった。

その姿を捉えた少女は、サツと私の背後に隠れた。その頭をそつと撫でる。

「奥はもういない。次行くぞ」

「あの」

そっけなく言い捨てて引き返そうとする玲二を、私は呼び止める。彼は不機嫌そうに立ち止まった。

「昨日、この子と会ったんですか？」

「……そうだな」

「騙したって本当ですか？」

「……だからどうした」

「……謝ってください」

途端、憑き物が落ちたような無表情になった玲二が冷やかな視線を向けた。そこに映る感情が読み取れず、私は思わず後ずさりした。

「……お前は、何もわかってない」

抑圧された声音が私の心根を突き刺しながら通り過ぎていく。立ち尽くした私の隣をすり抜けて、玲二は遠ざかっていった。

凍りついた私を、少女が袖口を引っ張って覚醒させた。「大丈夫。ごめんね」ときこちなく笑って、宝玉を拾いに向かう。

わかってないって、何だろう。確かに私は何もわかってない。知ろうともしてない。けれどそれでいいと思ってた。

玲二の後ろからついて行って宝玉を拾っただけの仕事だと。
私はバカだ。

#0006 「知らぬ者」(2)

ただ今、私の左手には暖かな温もりがある。

歩きながら、そつと隣を窺ってみる。

汚れた布を羽織った少女は、その琥珀色の瞳を柔らかく細めて飴を舐めている。すつと通った鼻梁に赤い唇。整ったその顔は、むしろ人形的に見える。

玲二は魔物だと言った。そうなのだろうか。人間にしか見えないこの少女が、あの凶暴な四足獣と同類？ そんな馬鹿な。

「ねえ、あなたって、魔物なの？」

問いかけられた少女はこちらを見上げ、それから視線を逸らした。ぼつり。

「ごめんなさい……」

「せ、責めてるわけじゃ！ ない、んだけど……」

自分はどうしてしまったんだろう。なんだか気持ちの浮き沈みが激しい。

「あ、そうだ。名前。名前聞いていい？」

そう聞くと、少女は首を傾げた。

「名前ってなに？」

「え？」

そう来るとは考えてなかった。

「え、さっき飴あげたあと聞いたでしょ？」

すると少女は思い出そうとして中空を見つめ、はっとした。

「モシヨボ！」

「モシヨボ？ っていう名前なのね？」

「名前？」

「ああ、うん、いいよ。それじゃあなたの名前はモシヨボね」

少女の笑顔が弾けた。

「モシヨボ！ あたしお姉さんのこと嫌いじゃないよ！」

「あ、ありがと。私もモシヨボ好きよ」

モシヨボは笑って、繋いだ手を揺らした。

しかし、玲二に追いつくとモシヨボは急に静かになって私の後ろに隠れた。

「……昨日アイツに」

そこまで言って黙り込んでしまった。

続きが気にはなっただけど、落ちている宝玉を拾って皮袋に入れる。なかなかの量になってきた。

そういえば、宝玉と魔獣の大きさは比例してる。大きな体格の魔獣はその分、出てくる宝玉が大きいのだ。どのような基準で宝玉がお金に変えられているのかはわからないけど、大きいほど値段は高そうに思う。

って私、考えること金銭面に偏りすぎかも。

とかなんとか思いつつ玲二の後を追う。

その後、一匹の魔獣を倒して入り口に到着した。

荷物を片付け、皮袋を玲二に手渡す。

すると、袋の中から宝玉を一つ取り出して渡してくれる。

「え、これは？」

「そのこの魔物にくれてやれ。その代わり”上”には絶対来させるな。上がってきた魔物は全て殺す」

言い捨てて玲二は階段を登っていく。

なにあれ？

そろそろテンプレ呼ばわりされるようになったツンデレ？

いや、どちらかというとクーデレ？

どっちでもいいけど。ダメだ、顔がにやける。

「だってさ！ えっと、これ。はい」

モシヨボはポカンと大口を空けてこちらを見ていた。

口の中に、細く長いピンク色した舌が見えた。

宝玉を受け取ると、モシヨボはそれを口に運んだ。
モゴモゴ。

ゴクン。

食べた。食べた。

「え、食べちゃっていいの!？」

首を傾げるモシヨボ。私が首を傾げたい。

「アイツ嫌い。だけど珠くれたから約束守る。上、行かない」

モシヨボはそう言うと、両手を使って扉を開けた。

「何処行くの？」

「帰るの。またね」

「あ、うん。明日も来るから」

にっこりと笑って。

「……頑張る」

何を頑張るんだろう。

不思議の思った私の前で、モシヨボは頭を布から出した。

毛先に向かって色素の落ちた菖蒲色の髪が羽みたいに広がった。

と思ったら、その髪の羽は自律的に動いて、モシヨボの体を浮き上がらせた。

「お姉さんばいばい」

笑顔で手を振るモシヨボに、私は呆然と立ち尽くしながらも手を振りかえした。

私をやつとの思いで階段を登りきれば、小部屋の壁に寄りかかった玲二がいた。

玲二が鍵を持つてるから、待っていてくれたんだ。

「ごめん、待った？」

「……いや」

……あれ、なんかデートの待ち合わせみた。

「ま、まあ、それはともかく！」
「ごほんと咳払い。」

した私に玲二が何かを投げしてきた。
咄嗟に掴み取って見たら鍵だ。

「この鍵だ。明日も来るなら使え」
「あ、うん」

そうだ、明日は土曜日で休みなのだ。
鍵がなければ防空壕には行けない。

「そだ、モシヨボに宝玉あげたら食べちゃったんだけど、それでいいの？」

「モーシヨボーだ」
寄りかかったまま、玲二。

「はい？」
再び硬直する私。意味が不明です隊長。解説を求めます。

しかし口にする前に玲二が勝手に喋り始めた。
「人の姿に化けた鳥だ。油断していると口を嘴に戻して頭に穴を開けて殺される」

「ぼかーんと数秒口を開いたあと、引き結ぶ。」
「モシヨボはそんなことしません。私はあの子を信じます！」

「そうだろうな。宝玉はいい栄養になる。しばらくは大人しくするだろうが、また腹を減らしたら、どうなるかはわからんな」

「宝玉って食べるものだったんだ……。でもその出自からして口に入れたいと思えないな。」

「それなら、少しだけ宝玉分けてください。それなら安心なんですよ？」

私が言うと、玲二は鼻であしらった。
「自分の分は自分で手に入れる」

踵を返して部屋を出て行く玲二を、私は追いかける。
「そ、そんなの無茶です！」

「銃があるだろ」

「先輩が引き金引くなんて……」

「俺が前にいて、絶対当てない自信があるのか？」

そう言われれば黙り込むしかない。

むしろまだ使ったことさえ無いのだ。

玲二が溜息を吐いた。

「手を出せ」

慌てて両手を出した私に、玲二が小さな宝玉を乗せた。

「これは？」

「両手で握りこんでみる」

言われたとおり両手でぎゅっとする。

数秒そのままで見ると、突然手のひら同士がくっついた。

驚いて手を開いてみれば、そこに宝玉はなかった。

「こっ！ これどういうことですか！ 何処に消えたんです!？」

「宝玉は、こっやって使うもんだ」

「ちゃんと答えてくださいよ!」

玲二は小部屋の鍵を閉めつつ。

「少しは自分で考える」

言い残し、歩み去っていった。

私はそれを呆然と見送って「天才一組野郎め……」と呟いた。

バイトが終了後、私は少女先輩と一緒にセンター街にある文化堂という和菓子のお店にいた。

もちろん《北条玲二真人間化計画》の相談のためである。

目の前には栗水羊羹とお茶。

店内に三つ用意された長テーブル席には私たちがしかない。

ちなみにお茶はタダで飲み放題だ。

私はお茶を啜って、切り出した。

「さて、あれから私考えたんですけどね」

「……何よ？」

「バイトをするってことは、お金が必要ってことですよね。掛け持ちするくらいだから、それも相当な額の」

「そうね。玲二君かっこいいし、お店でも結構人気あったらしいから、それなりの収入にはなったでしょうけど……」

私は一つ頷いて。

「そう考えると、借金っていう線は消えると思うんです。額にもよりますが、バイトの掛け持ちをしないと返せない借金っていうのは、すごい額になるんじゃないですかね」

「それはどうかしら？ 闇金みたいに利率が高いだだけかもしれないわよ？」

「あの頭のいい先輩が闇金なんかに頼りますかね……？」

少女先輩が頤に手を当てて「それはなさそうね」と呟く。

思わずにやけそうになる頬を引き締めて、私は続ける。

「借金は返してしまえばおしまいです。利子が高くても、きちんと返していけばその分負担は減るはず。私は良く知りませんが、今の仕事で先輩は、少なくとも以前のバイトと釣り合いがとれるほどには収入があるはずですよ」

「そういえば」

話の途中で少女先輩が割って入る。私はしぶしぶお口にチャックして聞く姿勢に移行した。

「あなたたち、何の仕事してるの？ 確か、玲二君のサポートとか言ってたわよね？」

「あー、はい。ええっと……」

こ、これはまずい予感がする。

「私たちも後を追ったことがあるんですけど、いつも実習棟で見失ってしまっし。あんなところで何のバイトをしているのかしら？」

やっべえええー！！

そういえばそういうことを気にしていなかった。

今度から気をつけないと、私のことだからついっつかりやっっちゃ

いそつだ。

「え、えつとお……か、体を張った仕事で、すうん、間違つてはない。」

しかしそれを聞いた少女先輩の視線に剣呑な光が宿った。

「ふうん、私にそういう話を持ちかけておきながら、自分は玲二君と体を使ったお仕事しちゃってるのね……」

「ちょ！ 何言っちゃってるんですか、違いますよ！ ほら、土方とかそういう、体力がいるお仕事っていうだけですよ！」

「具体的にはどういふなの？」

「さあキリキリ答えなさい！」と言わんばかりの少女先輩。冷や汗をかきながら、私はたまらず視線を逸らした。

「そ、そそれは社外秘密っていうか企業秘密っていうか守秘義務がありましたですね？」

「それで？ なに？」

「鬼だ！ 鬼がいる！」

「うう、わ、わかりましたよ」

「早く言いなさい」

私は携帯を取り出した。

「そんなに聞きたいならご自分で聞いてください！」

学園長のメモリーを開いて少女先輩に押し付ける。

少女先輩はその画面を見て、引きつった笑みを浮かべた。

「そ、そうね。知らないほうが幸せってことも、あるわよね。ほほほ」

「で、ですよね。あはははほほほ。」

あはは。

と乾いた笑いで場を流してしまふ。

羊羹を一つ、口に運んでお茶を飲み干す。

「さ、さて。続きですけど」

「そ……そうね、続きをどうぞ？」

「もう一つの可能性としては、病気説ですね。本人は至って元気そうなので、ご家族の誰か」

「玲二君、母子家庭で兄弟はいなかったはずよ」

「……じゃお母さんが？」

「うーん……そこらへんの詳しい話は良く知らないのよ」

私からすれば両親はうつつとおしいばかりだったけど、玲二は違
うんだろうな。

母子家庭。

玲二にとって頼れる人は母親だけ。

それと同時に、母親にとって頼れるのは玲二だけ。

「……やめよ。やめやめ！」

人の家の事情に踏み込むなんて、やっぱりよくない。

不満があるなら直接言えばいい。

本人の知らないところで繊細な問題に首を突っ込むなんて、
あの男みたいなこと……。

少女先輩が突然立ち上がった私を呆然とした様子で見上げる。

「私が直接聞けばいいのよ！」

そっだ！

パートナーなんだから、至少くらい相談してくれたり頼ってくれ
てもいいはずだ。

私は鼻息荒く決意すると、栗水羊羹に竹串を突き立てた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4013y/>

バニラとストロベリー

2011年11月22日02時56分発行